松山市文化財調査報告書143

東　本　遺　跡

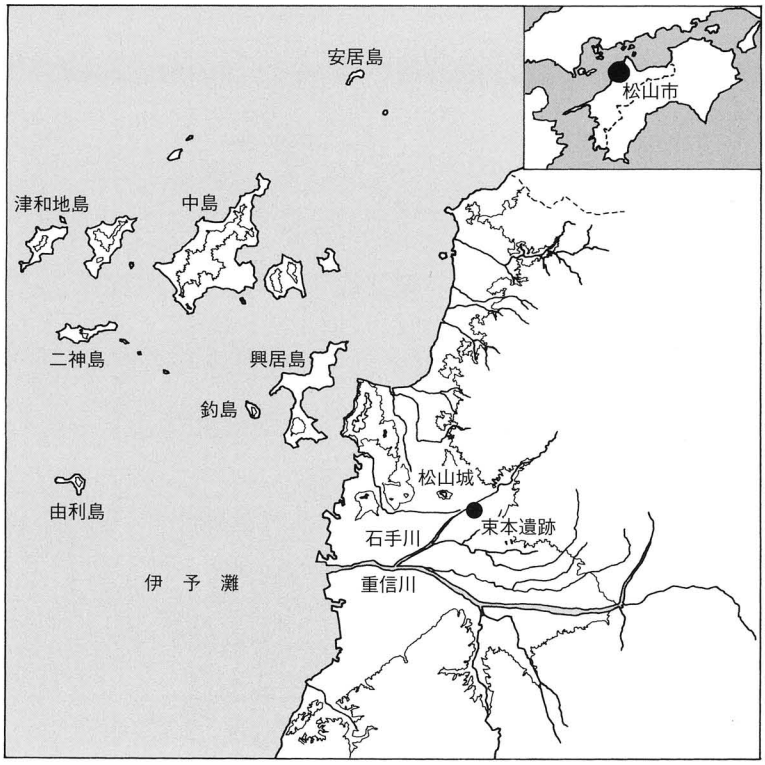
－11次・12次調査－

2010

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

東　本　遺　跡

－11次・12次調査－



2010

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

巻頭図版　東本遺跡11次調査　竪穴住居ＳＢ１（北より）

序

本書で報告する束本遺跡11次・12次調査は、民間開発に伴う事前の発掘調査です。束本遺跡では昭和51年に１次調査を行って以来、10次にわたる調査が行われ、旧石器時代から近世に至る貴重な遺構・遺物が数多く見つかっています。特に弥生時代後期の竪穴住居が多数見つかっており、一帯には大規模な集落が営まれていたことがわかってきました。

今回報告する束本遺跡11次調査では、弥生時代後期の竪穴住居１棟が見つかり、束本遺跡における竪穴住居の構造を解明する上で貴重な資料を得ることができました。また、束本遺跡12次調査では、溝などが見つかっています。

両遺跡とも開発により、遺跡が失われる場所に限っての部分的な調査ではありましたが、弥生時代後期の集落構造解明にむけた重要な手がかりを得ることができました。なお、地権者のご協力により、調査区外については適切に保存し後世に残せることとなっております。

束本遺跡11次調査の現地説明会には、たくさんの市民の方に参加をいただきましたが、このような埋蔵文化財の普及活動や適切な記録保存とともに円滑な遺跡の保護が図れましたのも、調査にご協力いただきました地権者ならびに各方面の方々のご理解とご協力のたまものであり、関係各位に厚くお礼申し上げます。

最後に、本書が埋蔵文化財の調査研究の一助となり、さらには文化財保護と生涯学習の向上に寄与できることを願っております。

平成22年３月31日

財団法人松山市生涯学習振興財団
理事長　中　村　時　広

例　　言

1．本報告書は、松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団　埋蔵文化財センターが実施した東本遺跡11次・12次調査の発掘調査報告書である。

2．東本遺跡11次調査は、松山市東本一丁目116番１、116番２、116番９、117番１の各一部において車検場建設に伴う事前調査として2008（平成20）年８月１日～2008（平成20）年９月26日までの間に実施した。

3．東本遺跡12次調査は、松山市東本一丁目119番1、120番２の各一部において店舗建設に伴う事前調査として2009（平成21）年７月６日～2009（平成21）年７月10日までの間に実施した。

4．遺物の実測・遺構図の製図等は、岩本美保、村上真由美、佐伯利枝が行った。

5．遺構の撮影は、大西朋子、担当調査員が行い、遺物撮影・写真図版の作成は大西朋子が行った。

6．遺構図・遺物図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。

7．遺構は以下の略号で記した。
竪穴住居：ＳＢ　　土坑：ＳＫ　　柱穴：ＳＰ　　溝：ＳＤ

8．使用した方位は、国土座標第Ⅳ系に基づく座標北（世界測地系）を基本とする。

9．本報告にかかわる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターに保管されている。

10．本報告の執筆・編集は、相原浩二が行った。

本　文　目　次

第１章　はじめに
第１節　遺跡の立地と歴史的環境……1
第２節　調査・刊行組織……6

第２章　東本遺跡11次調査
第１節　調査に至る経緯……9
第２節　調査の経過……9
第３節　層位……11
第４節　遺構と遺物……12
第５節　小結……28

第３章　東本遺跡12次調査
第１節　調査に至る経緯……39
第２節　調査の経過……40
第３節　層位……40
第４節　遺構と遺物……42
第５節　小結……43

挿　図　目　次

第１章　はじめに

第１図　調査地位置図……1
第２図　包蔵地図と調査地位置図……2
第３図　調査地と周辺の遺跡……4

第２章　東本遺跡11次調査

第４図　調査区位置図……10
第５図　土層図……12
第６図　遺構配置図……13
第７図　ＳＢ１測量図（１）……14
第８図　ＳＢ１測量図（２）……15
第９図　ＳＢ１出土遺物実測図（１）……17
第10図　ＳＢ１出土遺物実測図（２）……18
第11図　ＳＫ２測量図……19
第12図　ＳＫ２出土遺物実測図……19
第13図　ＳＫ３・４・５・６測量図……20
第14図　ＳＫ４・５・６出土遺物実測図……20
第15図　ＳＤ２測量図……21
第16図　ＳＤ２出土遺物実測図……22
第17図　ＳＤ１測量図……23
第18図　ＳＤ１出土遺物実測図……23
第19図　ＳＫ１測量図……24
第20図　ＳＫ１出土遺物実測図……24
第21図　柱穴測量図……25
第22図　柱穴出土遺物実測図……26
第23図　表採遺物実測図……28

第３章　東本遺跡12次調査

第24図　調査区位置図……39
第25図　１区土層図……41
第26図　２区土層図……41
第27図　１区測量図……42
第28図　１区出土遺物実測図……42
第29図　２区測量図……43

表　目　次

東本遺跡11次調査

表１　ＳＢ１出土遺物観察表　土製品……29
表２　ＳＢ１出土遺物観察表　鉄製品……31
表３　ＳＢ１出土遺物観察表　石製品……31
表４　ＳＫ２出土遺物観察表　土製品……31
表５　ＳＫ４出土遺物観察表　土製品……31
表６　ＳＫ５出土遺物観察表　土製品……31
表７　ＳＫ６出土遺物観察表　土製品……31
表８　ＳＤ２出土遺物観察表　土製品……31
表９　ＳＤ２出土遺物観察表　鉄製品……32
表10　ＳＤ２出土遺物観察表　石製品……32
表11　ＳＤ１出土遺物観察表　土製品……33
表12　ＳＫ１出土遺物観察表　土製品……33
表13　ＳＰ２出土遺物観察表　土製品……33
表14　ＳＰ７出土遺物観察表　土製品……33
表15　ＳＰ８出土遺物観察表　土製品……33
表16　ＳＰ14出土遺物観察表　土製品……33
表17　ＳＰ19出土遺物観察表　土製品……34
表18　ＳＰ22出土遺物観察表　土製品……34
表19　ＳＰ28出土遺物観察表　土製品……34
表20　１区表採遺物観察表　土製品……34
表21　竪穴住居一覧……35
表22　溝一覧……35
表23　土坑一覧……35
表24　柱穴一覧……35

東本遺跡12次調査

表25　１区出土遺物観察表　土製品……44
表26　溝一覧……44

写真図版目次

巻頭図版

東本遺跡11次調査　竪穴住居ＳＢ１（北より）

東本遺跡11次調査

図版１　１．調査前風景（東より）
　　２．掘削状況（西より）
図版２　１．遺構検出状況（西より）
　　２．竪穴住居ＳＢ１検出状況（西より）
図版３　１．作業風景（南西より）
　　２．竪穴住居ＳＢ１遺物出土状況（北より）
図版４　１．竪穴住居ＳＢ１北西部遺物出土状況（西より）
　　２．竪穴住居ＳＢ１内炉検出状況（南より）
図版５　１．竪穴住居ＳＢ１完掘状況（北より）
　　２．ＳＫ２検出状況（南より）
図版６　１．現地説明会風景（北より）
　　２．調査地完掘状況（西より）
図版７　１．竪穴住居ＳＢ１出土遺物①
図版８　１．竪穴住居ＳＢ１出土遺物②
　　２．ＳＫ２出土遺物
　　３．ＳＤ２出土遺物

東本遺跡12次調査

図版９　１．調査前風景（北西より）
　　２．１区調査前状況（西より）
図版10　１．１区土層（西より）
　　２．１区完掘状況（南西より）
図版11　１．２区調査前状況（南東より）
　　２．２区遺構検出状況（西より）
図版12　１．２区遺構検出状況（東より）
　　２．１区出土遺物
　　３．２区完掘状況（東より）

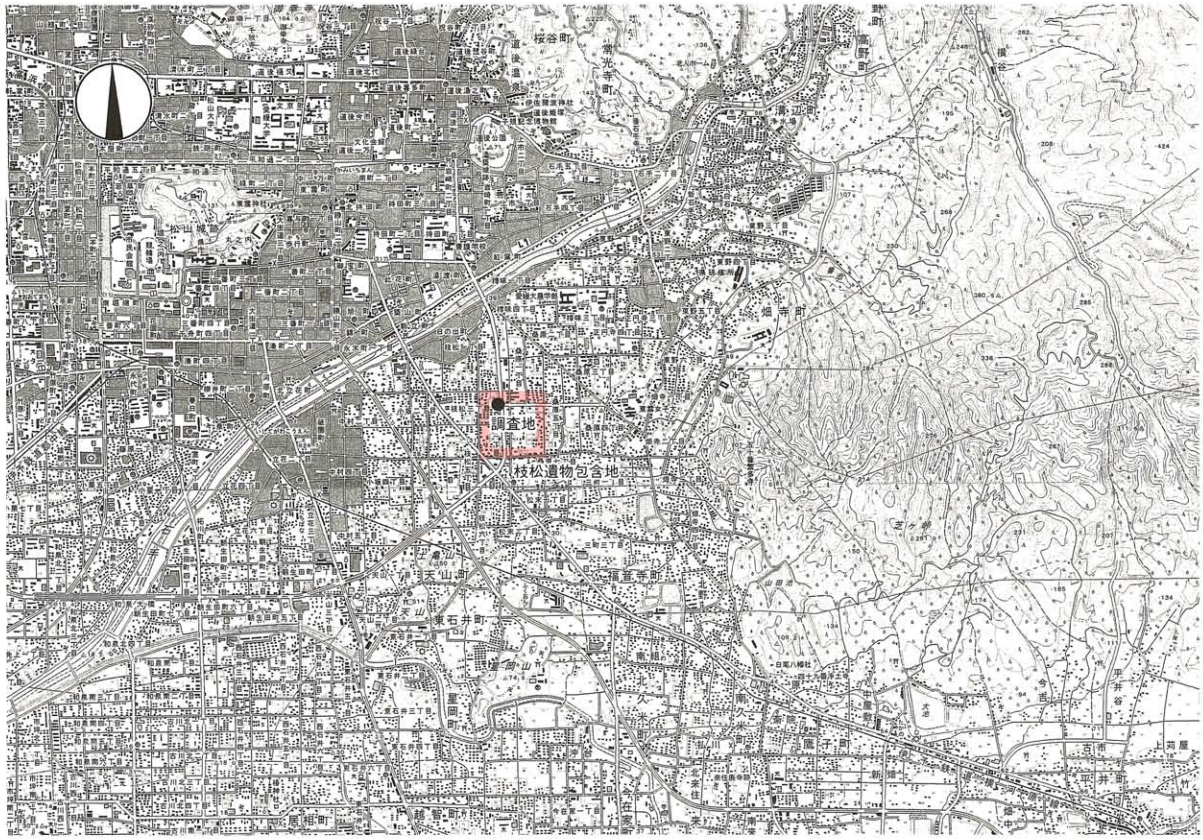
第１章　はじめに

第１節　遺跡の立地と歴史的環境

（１）遺跡の立地

松山平野は、重信川や石手川によって形成された沖積平野である。この平野の北東部に束本遺跡11次・12次調査地は位置し、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地「№83　枝松遺物包含地」内に所在する。枝松遺物包含地の北を西流する石手川は、高縄山塊の水ヶ峠に源を発し平野の北東部を流れ、重信川に合流し伊予灘に注ぐ河川である。石手川は、平野への入り口である岩堰から江戸時代のはじめに河川の改修によって流路を代えられ現在に至っている。束本遺跡は、この石手川中流域の左岸に立地し石手川によって形成された扇状地上に展開している。束本遺跡11次調査は、その扇状地上の標高32.20m、束本遺跡12次調査は35.40mに立地する。

調査地周辺は、約25,000年前に姶良カルデラの噴火により噴出した姶良Ｔｎ（ＡＴ）火山灰と約7,300年前に鬼界カルデラの噴火により噴出したアカホヤ火山灰の降下が広範に確認されている地域である。両遺跡が所在する扇状地面は、姶良Ｔｎ（ＡＴ）火山灰の降下・堆積期にはすでに段丘化していたと推定され縄文時代や弥生時代の遺跡の立地については、安定した地形環境であったとされている〔平井1989〕。中世末期より石手川からの灌漑用水路の整備により周辺域は水田が開けていたが、開発が著しい地域となり水田も減少の一途をたどっている。



第１図　調査地位置図（Ｓ＝１：50,000）

（2）歴史的環境

本遺跡のある東本町は桑原地区と呼ばれ、数多くの遺跡が存在し注目される遺構・遺物がたくさん見つかっている。これまでの調査では弥生時代～古代にかけての竪穴住居、掘立柱建物、土坑、溝などの集落遺構のほか、東の丘陵部では古墳時代中期～後期の古墳が多数検出されている。東に接する桑原町内には前方後円墳である三島神社古墳〔森光晴1972〕、経石山古墳が所在している。

調査地の北東部にある樽味町内では『貨泉』の出土があった樽味立添遺跡、「船」を描いた弥生時代後期の線刻土器が出土した樽味高木３次調査地、古墳時代初頭の大型掘立柱建物が見つかった樽味四反地遺跡６次、８次、13次調査地など貴重な遺構・遺物が見つかっている。ここでは東本遺跡を中心に隣接する枝松町、桑原町などの遺跡を時代毎に概説する。

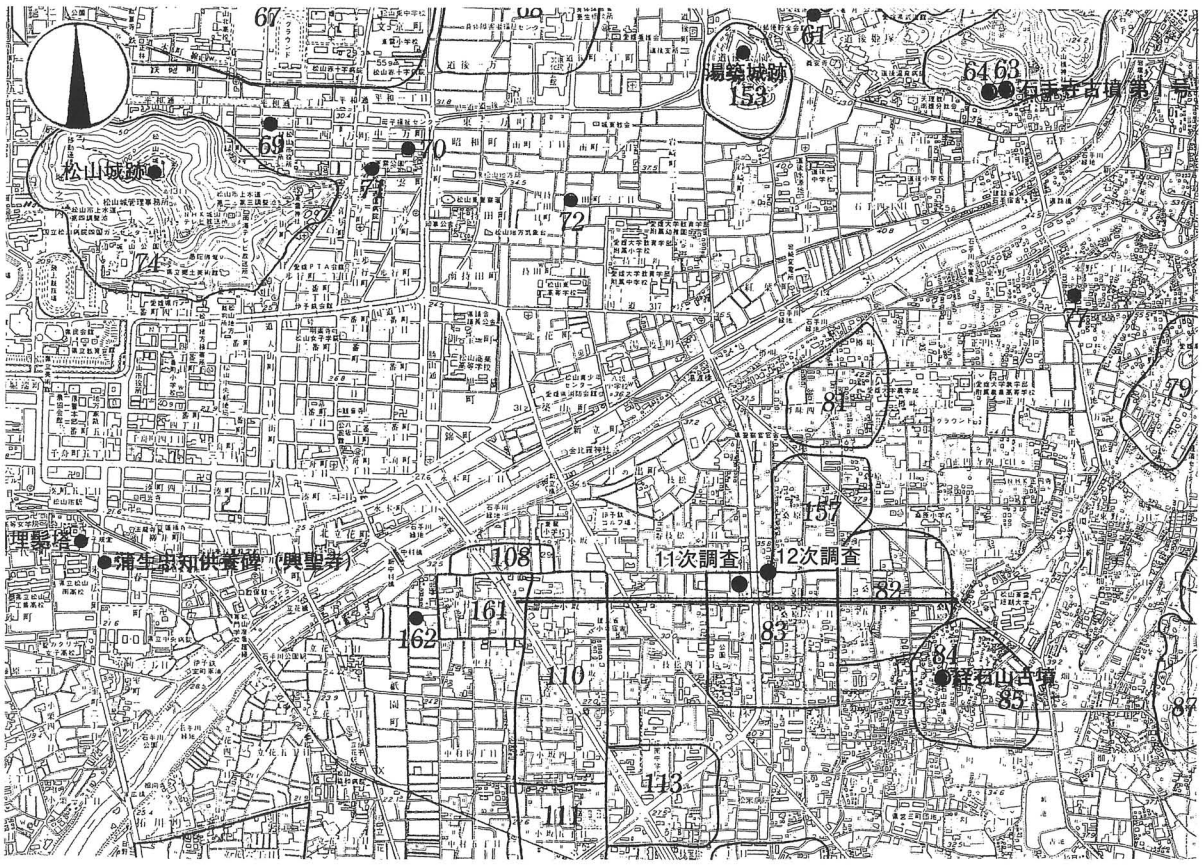
縄文時代

東本遺跡４次調査では、縄文早期にあたるアカホヤ火山灰の層中と下層の上面から先土器時代末から縄文時代早期以前の石器が見つかっている。また、アカホヤ以前の堆積層中から焼土を検出している。これらのことから縄文時代早期以前の遺跡が存在したことが想定されている〔高尾1996〕。晩期では桑原田中遺跡で突帯文系の深鉢片が一点出土している。

弥生時代

前期では、明確な遺構は検出されていない。桑原田中遺跡２次調査地で土器片を検出している〔梅木・山本1994〕。

中期では、遺物は散見されるものの明確な遺構は少ない。枝松遺跡６次調査では中期後半の土坑２基を検出している〔加島2007〕。中期後半～後期初頭にかけての遺構は桑原地区内では標高の高い北



第２図　包蔵地図と調査地位置図（Ｓ＝１：25,000）

東部の樽味町で検出されている。樽味高木遺跡２次調査〔栗田1994〕、樽味四反地５次調査地〔高尾2002〕、樽味高木７次調査地では大型円形竪穴住居や小型の方形住居を検出している。樽味高木９次調査地では中期後半の掘立柱建物１棟、土坑２基を検出している。樽味四反地７次調査地では土坑２基を検出している〔加島2007〕。

後期では遺構・遺物ともに格段に増加する。桑原田中遺跡で素掘りの井戸と考えられるＳＫ１より後期後葉の一括性の高い遺物が出土している〔松村1992〕。桑原高井遺跡では竪穴住居５棟、土坑、溝を検出している〔森1980〕。桑原高井遺跡３次調査では後期末と考えられる中型の円形竪穴住居ＳＢ001を検出している。ＳＢ001の全容は不明であるが「張り出し部」を伴うものとも考えられている〔小笠原2003〕。桑原稲葉遺跡では円形と方形の竪穴住居が検出されている〔岡田他1990〕。後期後葉～末の竪穴住居の枝松遺跡３次調査で後期後葉の隅丸方形住居にベッド状を付設する竪穴住居１棟を検出している〔梅木1992〕。調査地の南に隣接する枝松遺跡５次調査では、後期後葉の方形竪穴住居１棟と円形周溝状遺構を検出している〔河野1997〕。枝松遺跡８次調査では方形竪穴住居２棟を検出している。方形竪穴住居ＳＢ201の埋土からは多量の廃棄された土器が出土している。これら土器群のほか、注目する遺物として皮袋形土器１点、破損品であるが環状石斧１点が出土している。枝松遺跡10次調査のＳＤ301より後期前葉から末の遺物が出土している〔相原・武正2008〕。東本遺跡では竪穴住居の一部と溝状遺構が検出されている。東本遺跡２次調査では竪穴住居２棟、土坑、掘立柱建物などが検出されている。竪穴住居の平面形態は方形と円形の２種類があり、いずれにもＴ字状の炉址が備えられている〔森1986〕。東本遺跡４次調査では大型･中型･小型の竪穴住居19棟を検出している。このうち注目するものに周堤帯を検出した大型の円形竪穴住居ＳＢ203、破鏡が出土した大型円形竪穴住居ＳＢ302がある〔高尾1996〕。東本遺跡５次調査では円形竪穴住居５棟、方形竪穴住居２棟が検出されている。このうち方形竪穴住居１棟を除く全てにベッド状施設が付設されている。東本遺跡６次調査では大型の円形竪穴住居１棟と方形の竪穴住居１棟を検出している。方形の竪穴住居は、鍛冶関連遺構の可能性をもつ。大型の円形住居は後期末に、方形竪穴住居は後期後葉とされる。東本遺跡７次調査では方形竪穴住居２棟と大型円形竪穴住居１棟を検出している。このうち方形竪穴住居１棟を除く２棟は東本遺跡５次調査で検出されている大型竪穴住居と方形竪穴住居の東部分である〔河野2004〕。東本遺跡８次調査では後期末のベッド状遺構を付設した方形竪穴住居１棟を検出している〔宮内2007〕。東本遺跡９次調査では後期後葉のベッド状遺構を伴う大型の円形竪穴住居ＳＢ１を検出している。埋土中には多量の土器が廃棄されている〔相原2008〕。東本遺跡10次調査後期後葉の土坑１基と後期末のベッド状遺構を付設し貼床をもつ大型の円形竪穴住居１棟を検出している。竪穴住居はベッド状遺構部と住居基底面に遺存する周壁溝の形状や切り合い関係などにより方形竪穴住居から円形竪穴住居への建替えが想定されている〔相原2008〕。

古墳時代

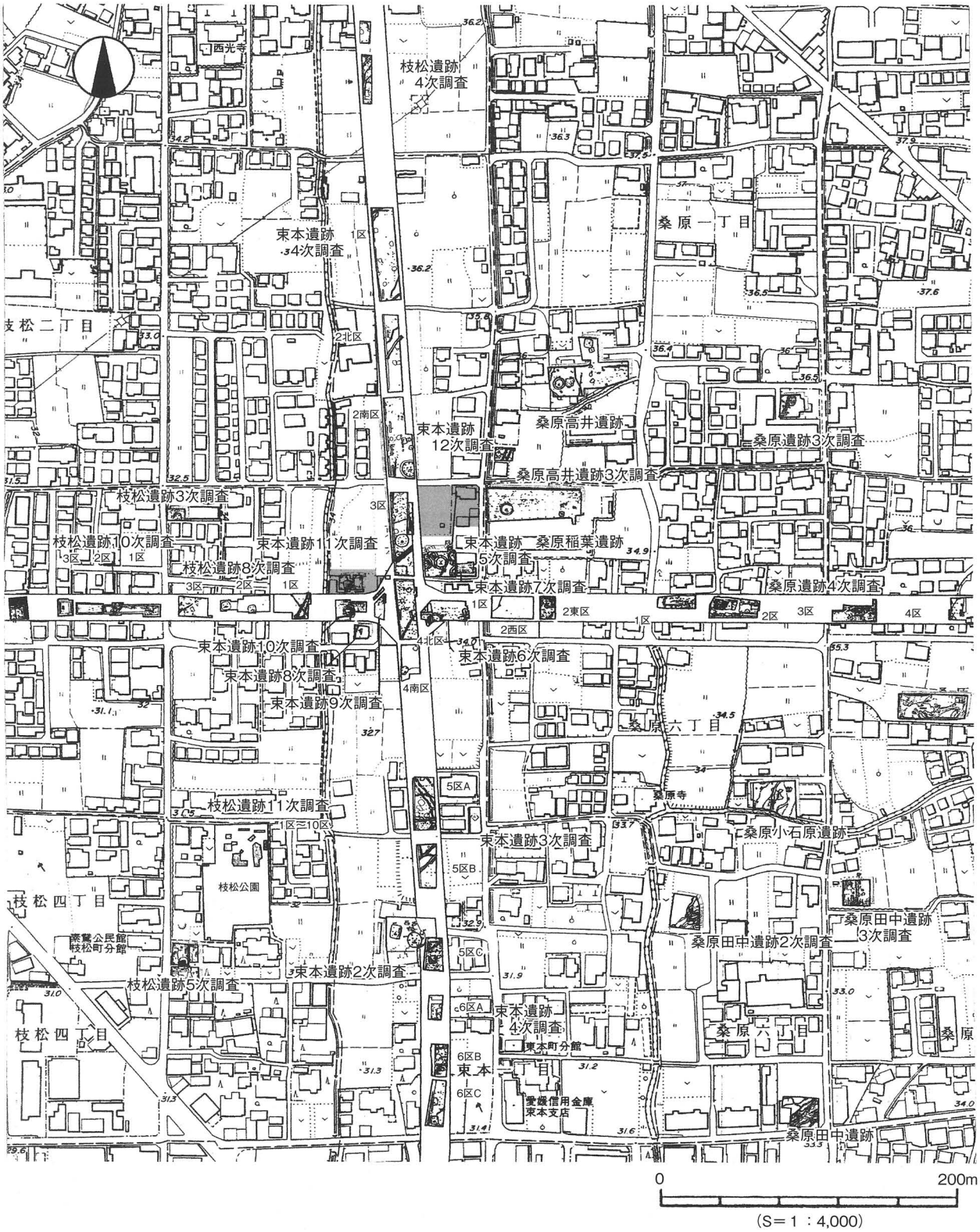
前期では桑原遺跡３次調査の溝より弥生時代末～前期の遺物が出土している〔相原2001〕。桑原遺跡４次調査の自然流路ＳＲ401では溝の埋土より前期～後期の遺物が出土している〔相原・武正2005〕。

中期では桑原田中遺跡で須恵器樽形瓶が出土している。桑原本郷遺跡では竪穴住居、掘立柱建物が検出されている。そのほか包含層中より須恵器と伴に滑石製の臼玉100点余りが出土しており祭祀遺構と考えられている〔栗田2002〕。

後期では桑原遺跡５次調査で自然流路より杓子状木製品、木錘、斎串が出土している〔吉岡2004〕。

古代

東本遺跡６次調査では、古代末に埋没したと考えられる自然流路ＳＲ201を検出している。ＳＲ201は川幅が30m以上を測る。埋土中より近江系の緑釉が出土している〔相原2005〕。



第３図　調査地と周辺の遺跡

中世

桑原田中遺跡３次調査では土坑状遺構を検出している〔山本1997〕。桑原遺跡４次調査４区では、祭祀遺構と考えられる柱穴１基を検出している。３区では掘立柱建物や土坑、溝を検出している。桑原高井遺跡では「首塚」とされる土坑墓が数基検出されている。東本遺跡６次調査でも同様な土坑墓１基を検出している〔相原・武正2005〕。桑原遺跡５次調査では掘立柱建物４棟を検出している〔吉岡2004〕。枝松遺跡４次調査では、土坑ＳＫ１より松山平野では珍しいほぼ完形の茶釜が出土している〔大森1996〕。

〔参考文献〕

森　　光晴　1972『三島神社古墳』松山市教育委員会
松山市史料集編集委員会　1980松山市史第１巻抜刷　自然編
森　　光晴　1980「桑原高井遺跡」『浮穴・西石井荒神堂・東本Ⅱ・Ⅲ・桑原高井遺跡』松山市文化財報告書14
　　1986「東本遺跡」「経石山古墳」『愛媛県史　資料編　考古』
平井　幸弘　1989「石手川扇状地城北地区における沖積低地の地形発達と考古遺跡の立地環境」『愛媛大学教育学部紀要Ⅲ自然科学. ９』愛媛大学
岡田　敏彦　1990「桑原稲葉遺跡」『桑原住宅埋蔵文化財調査報告書』
松村　　淳　1992「桑原田中遺跡」『桑原地区の遺跡』松山市文化財報告書26
梅木　謙一　1992「枝松遺跡３次」『桑原地区の遺跡』松山市文化財報告書26
栗田　正芳　1994「樽味高木遺跡２次調査地」『桑原地区の遺跡Ⅱ』松山市文化財報告書46
梅木・山本　1994「桑原田中遺跡２次」『桑原地区の遺跡Ⅱ』松山市文化財報告書46
高尾・大森　1996「東本遺跡４次調査」『東本遺跡４次調査地・枝松遺跡４次調査地』松山市文化財報告書54
河野　史知　1997「枝松遺跡５次」『桑原地区の遺跡Ⅲ』松山市文化財報告書58
山本　健一　1997「桑原田中遺跡３次」『桑原地区の遺跡Ⅲ』松山市文化財報告書58
相原　浩二　2001「桑原遺跡３次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報12』
栗田　茂敏　2002「桑原本郷遺跡」『桑原地区の遺跡Ⅳ』松山市文化財報告書86
高尾　和長　2002「樽味四反地遺跡５次調査」松山市文化財調査報告書87
小笠原　彰　2003「桑原高井遺跡３次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報14』
吉岡　和哉　2004『桑原遺跡５次調査地』松山市文化財報告書99
河野　史知　2004「東本遺跡７次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報16』
相原・武正　2005『東本遺跡６次調査地・桑原遺跡２次調査地・桑原遺跡４次調査地』松山市文化財報告書105
加島　次郎　2007「枝松遺跡６次調査地」『東野森ノ木遺跡１・２・３・４次調査地　他』松山市文化財報告書117
宮内　慎一　2007「東本遺跡８次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報19』
相原　秀人　2008「東本遺跡９次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報20』
相原　浩二　2008「東本遺跡10次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報20』
相原・武正　2008「枝松遺跡７次調査」『枝松遺跡―７次・８次・９次・10次―』松山市文化財調査報告書125

第２節　調査・刊行組織

（20年度　調査組織）

松山市教育委員会

	教育長	山内　泰
事務局	局長	石丸　修
	企画官	仙波　和典
	企画官	古鎌　靖
	企画官	岸　紀明
文化財課	課長	家久　則雄
	主幹	森　正経
	主幹	森川　惠克

（財）松山市生涯学習振興財団

	理事長	中村　時広
事務局	局長	吉岡　一雄
埋蔵文化財センター		
	所長	丹生谷博一
	次長	折手　均
	次長	重松　佳久
	調査担当リーダー	栗田　茂敏
	教育普及担当リーダー	梅木　謙一
	調査担当	相原　浩二
	写真担当	大西　朋子

（21年度　調査・刊行組織）

松山市教育委員会

	教育長	山内　泰
事務局	局長	藤田　仁
	企画官	古鎌　靖
	企画官	青木　茂
	企画官	佐々木乾二
文化財課	課長	家久　則雄
	主幹	森　正経
	副主幹	三好　博文

（財）松山市生涯学習振興財団

	理事長	中村　時広
事務局長兼松山市考古館館長		松沢　史夫
埋蔵文化財センター		
	所長兼総務課長	白石　修一
	次長	折手　均
	次長	重松　佳久
	調査担当リーダー	栗田　茂敏
	教育普及担当リーダー	梅木　謙一
	調査担当	相原　浩二
	写真担当	大西　朋子

第２章　東本遺跡11次調査

第２章　東本遺跡11次調査

第１節　調査に至る経緯

2008（平成20）年４月21日、松山市東本一丁目116番１、116番２、116番９、117番１における車検整備工場の建設に伴う埋蔵文化財の確認願いが、松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。申請地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地「№83　枝松遺物包含地」内にある。松山市道東部環状線と中村桑原線が交わる交差点の北西部に位置する。申請地周辺は宅地開発や道路整備によって数多くの調査が行われ、旧石器時代から中世に至る遺構・遺物が確認されており、松山平野の主要な遺跡地帯となっている。申請地南側の隣地（市道中村桑原線）においても平成19年に９次・10次調査が行われ、ともに弥生時代後期の竪穴住居１棟などが見つかっている。

文化財課では、確認願いが提出された地番について遺跡の有無と、その範囲や性格を把握するために、試掘調査をする事となった。試掘調査は文化財課指導のもと財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋蔵文化財センター）が2007（平成19）年５月２日に行った。調査の結果、調査地の東側に弥生時代と中世の遺構・遺物が見つかり弥生時代と中世の集落関連遺跡があることを確認した。この結果を受けて埋蔵文化財センターと申請者は、発掘調査についての協議を行い、開発に伴って消失する部分の遺跡に対して、記録保存のため本格調査を実施することとなった。調査は埋蔵文化財センターが主体となり、申請者の協力のもと2008（平成20）年８月１日から同年９月26日までの間に実施した。

第２節　調査の経過

（１）調査区の設定

試掘調査の結果、西側の一部を除いた全域に遺跡が存在することが判明した。調査地の南東部は、東本遺跡９次調査に隣接する。東本遺跡９次調査では、竪穴住居ＳＢ１が検出され埋土中からは多量の土器などが出土している。そのＳＢ１の一部が試掘調査により本調査地にも及んでいることが確認されたが、遺跡保護の観点から調査範囲は建設に伴い遺構に影響があると判断された箇所に限られた。そのため東本遺跡９次調査のＳＢ１は今回の調査範囲には含まれていない。調査区は西側を１区、東側の小区画を２区として調査を行った。

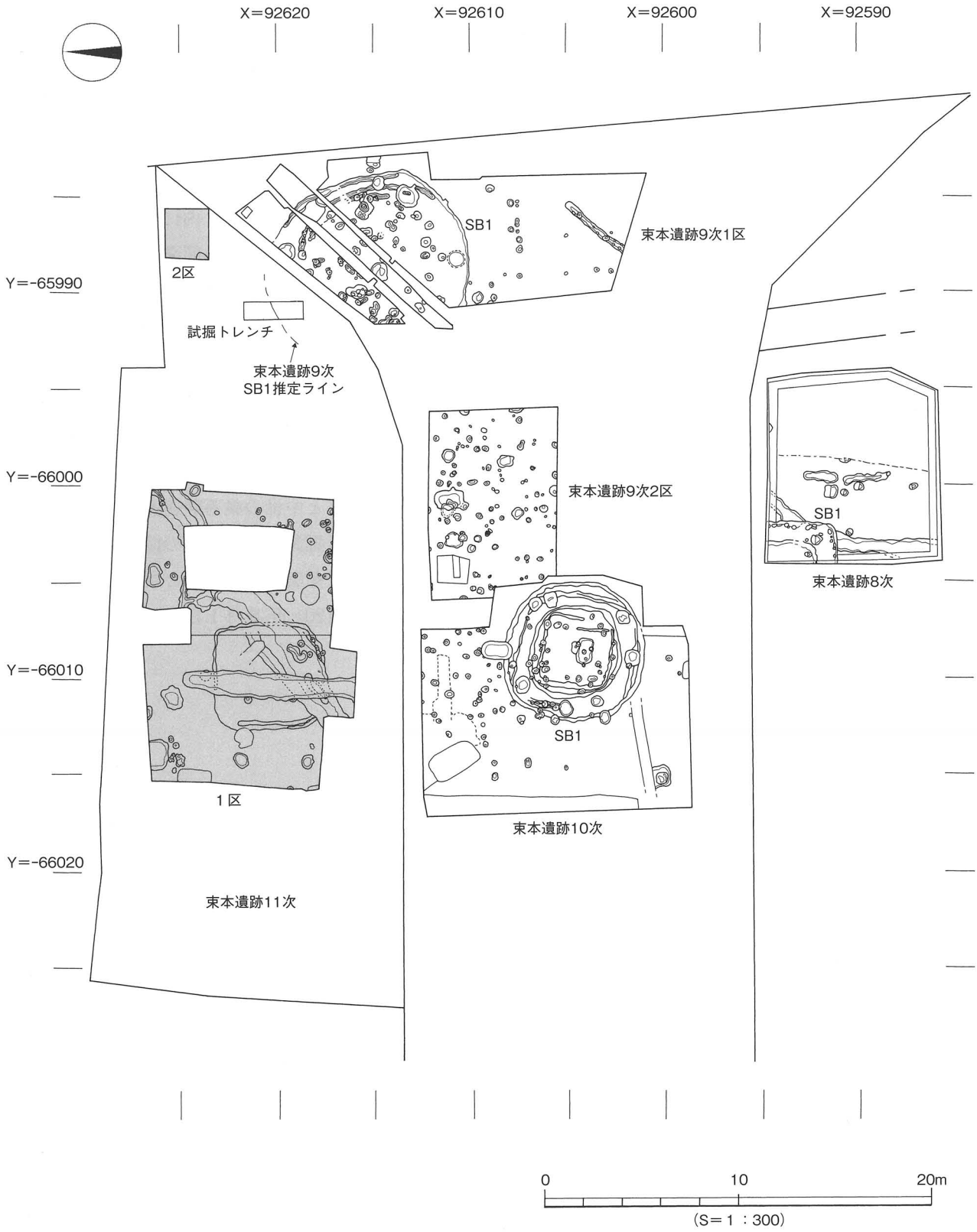
（２）調査の経過

野外調査は、平成20年８月１日～同年９月26日まで行った。以下、調査工程を略記する。

平成20年８月１日（金）　発掘用具、機材の準備を行う。調査地に縄張り等の安全対策を行う。調査地内の草刈りを行い、調査前の写真撮影を行う。

４日（月）　調査事務所と倉庫の設置を行う。調査範囲の設定作業を行う。

５日（火）　重機による掘削を開始し、１区・２区を６日までの二日間に重機による土砂の掘削を行う。


X=92620
X=92610
X=92600
X=92590
Y=-65990
Y=-66000
Y=-66010
Y=-66020
2区
試掘トレンチ
東本遺跡9次
SB1推定ライン
SB1
東本遺跡9次1区
東本遺跡9次2区
SB1
東本遺跡8次
SB1
東本遺跡10次
1区
東本遺跡11次
0
10
20m
(S=1：300)

第４図　調査区位置図

６日(水)　重機による掘削が終了した箇所より遺構検出作業を開始する。

７日(木)　人力によって遺構検出作業を11日まで行う。

19日(火)　高所作業車を使用し、遺構検出状況の写真撮影を行う。世界測地系の国土座標軸６点（４級）を設置する。遺構配置図を作成し、遺構の掘り下げを開始する。

21日(木)　土坑、柱穴、溝などの遺構の掘り下げをほぼ終了する。順次測量作業を実施し測量図面の作成を行う。

22日(金)　弥生時代の竪穴住居ＳＢ１の平面プランを再度確認し写真撮影を行う。撮影終了後、ＳＢ１の掘り下げを開始する。

27日(水)　土坑ＳＫ２の平面形態の精査を行う。ベルトを設定し掘り下げを行い、土層の堆積状況を精査する。

28日(木)　竪穴住居ＳＢ１内で焼土、炭、土器、石器などを検出する。

９月２日(火)　ＳＢ１のベルト土層の測量作業を行う。ＳＢ１内の遺構・遺物などの平面測量を開始する。

３日(水)　ベルト撤去作業。炉、主柱穴を検出する。鉄器を検出する。

５日(金)　ＳＢ１内遺物出土状況の写真撮影（土器、石器、炭、焼土、白色粘土）など。撮影終了後、白色粘土の堆積状況を確認するためトレンチを掘削する。土層断面の堆積状況の精査を行い測量図を作成する。

10日(水)　２区掘削作業。土層の精査及び測量作業を行う。

11日(木)　ＳＢ１の床面の精査を行い、主柱穴より柱痕跡を検出する。主柱穴の測量作業を行う。

22日(月)　現地説明会の準備作業を行う。調査区内の水抜き作業、遺構の清掃作業を行う。展示写真、遺物のキャプション作成作業。

23日(火)　秋分の日。午前10時すぎより、現地説明会を開催する。約50名の方に参加をいただいた。現地説明会の様子を愛媛朝日テレビ、南海放送にてテレビ報道される。午後よりＳＢ１内のベルト撤去作業などを行う。

24日(水)　ＳＢ１の焼土除去作業、サンプル採取作業を行う。高所作業車を使用し、遺構完掘状況の写真撮影を行う。測量作業を終了する。

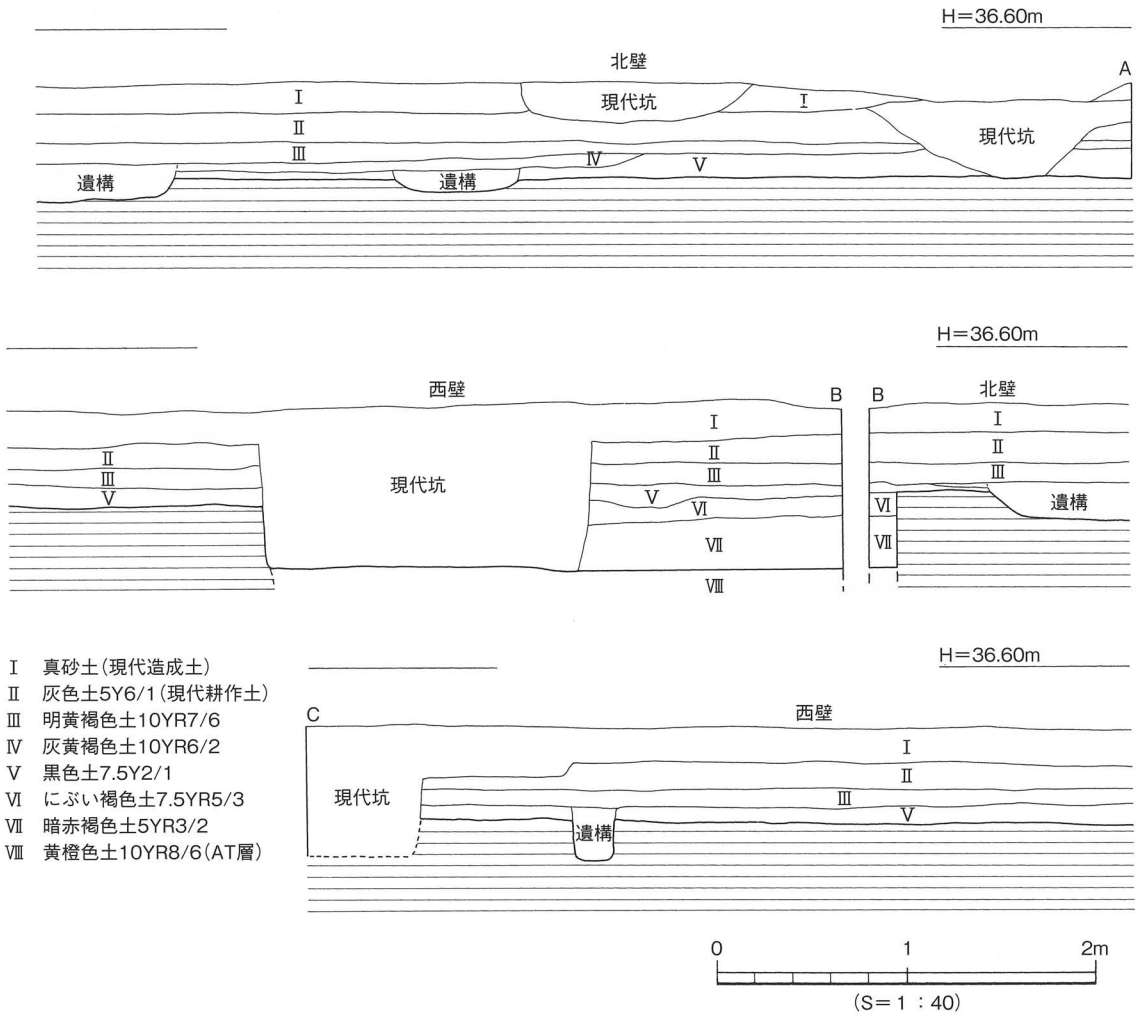
25日(木)　調査地内の清掃作業を行う。発掘用具、測量用具などの発掘関連資材や器材の撤収を行う。ハウス、備品、機材などの撤去作業を行う。

26日(金)　発掘用具の清掃・整理を行い、現場調査を終了する。

第３節　層位

調査地周辺は、約22,000年～25,000年前に噴出・降下したＡＴ火山灰と約6,300年前に噴出・降下した鬼界アカホヤ火山灰が広範に確認されている地域である。本調査地でもＡＴ火山灰を確認している。調査地は宅地だったため部分的に撹乱がみられた。調査は１区と２区の２か所で行った。１区、２区とも土層堆積や現代の削平状況は同じであり、地形的変化もなく地表面の標高も同一であった。

１区の基本層序は上から第Ⅰ層客土（層厚14～18cm)、第Ⅱ層灰色土（層厚10～16cm)、第Ⅲ層明



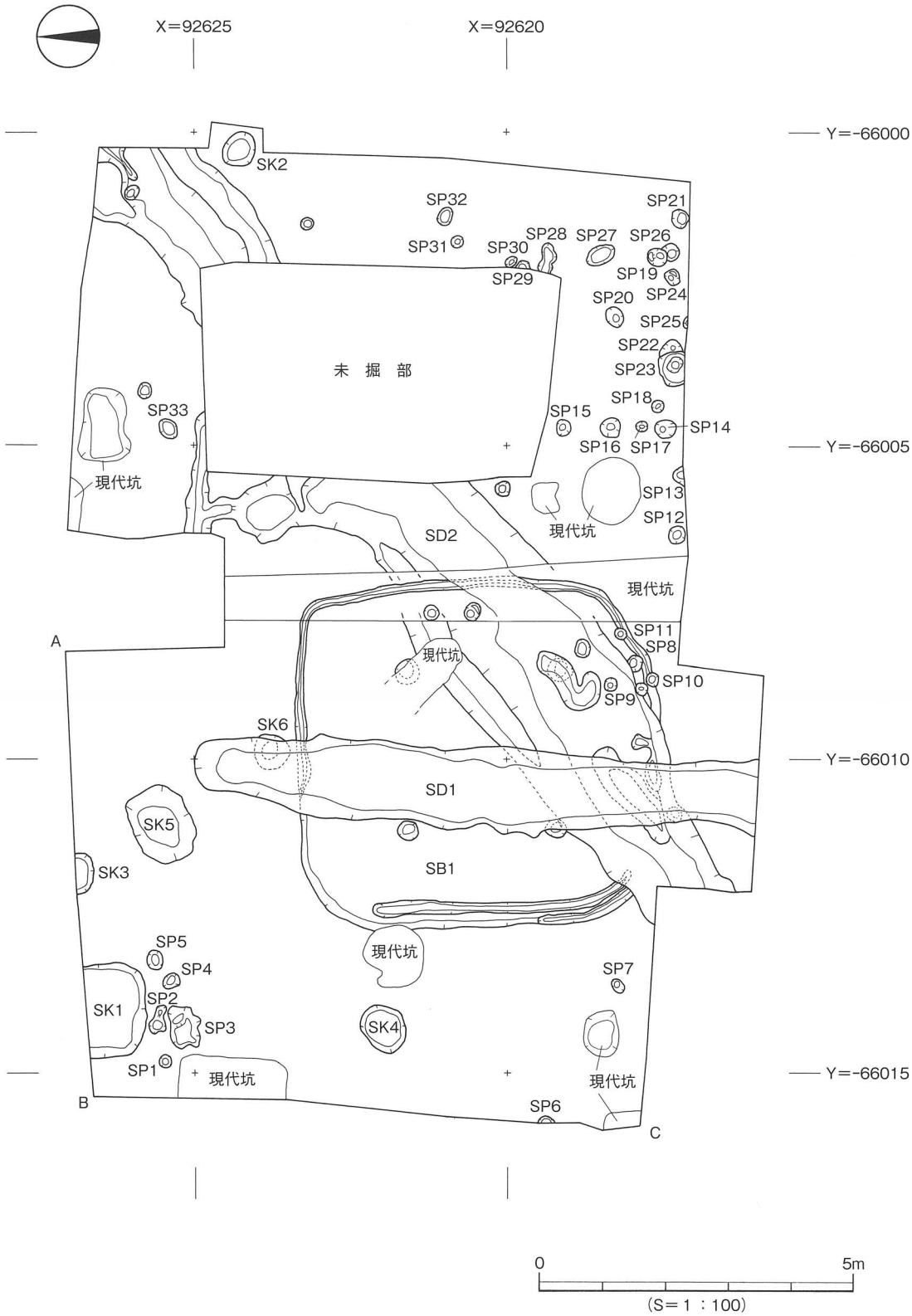
第５図　土層図

黄褐色土（層厚約６～10cm）、第Ⅳ層灰黄褐色土（層厚2～６cm）、第Ⅴ層黒色土（層厚８～12cm）、第Ⅵ層にぶい褐色土（層厚約６～10cm）、第Ⅶ層暗赤褐色土（24～30cm）、第Ⅷ層黄橙色土である。

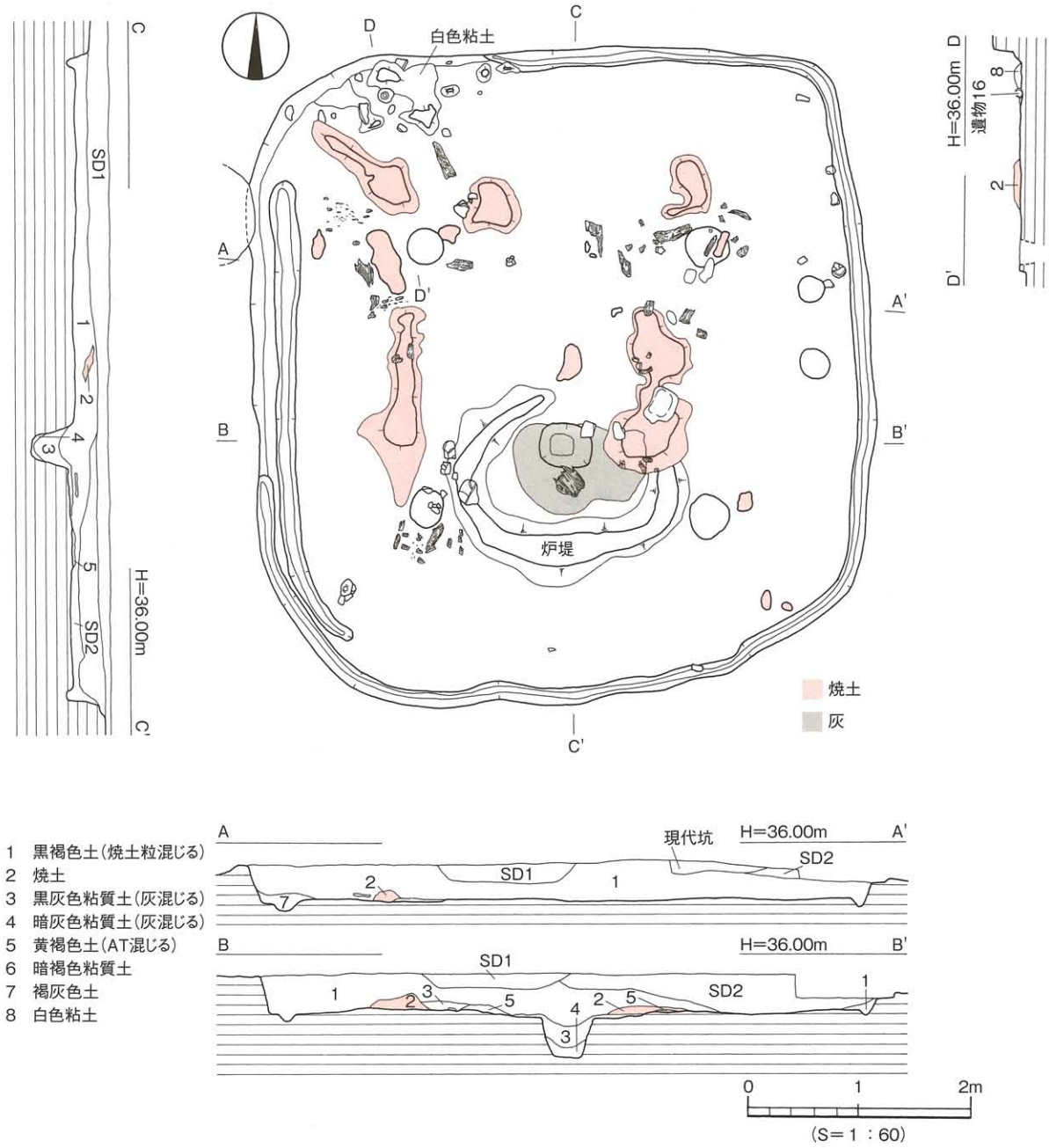
第Ⅰ層は造成土。第Ⅱ層は現代の耕作土。第Ⅲ層は第Ⅱ層の床土である。このうち第Ⅳ層は中世の土器片が含まれる。第Ⅴ層はアカホヤ火山灰が混じる層である。周辺の遺跡では第Ⅴ層上に黒褐色の弥生時代の包含層がみられるが、本調査地では中世以降による削平のため遺存していない。第Ⅵ層のにぶい褐色土は、東本周辺で地山と呼ばれる層である。第Ⅶ層は、周辺遺跡の調査成果よりＡＴ火山灰層の二次堆積層に相当するものと考えられる。遺物は、第Ⅴ層以下からは検出しなかった。１区、２区とも遺構の確認は、第Ⅶ層上面で行った。

第４節　遺構と遺物

１区で検出した遺構は竪穴住居（ＳＢ）１棟、土坑（ＳＫ）６基、柱穴（ＳＰ）34基、溝（ＳＤ）２条である。遺物は、弥生土器、土師器、青磁などが出土した。２区では、現代坑１基を検出したのみで遺物の出土も無かった。よって、時代毎に１区の遺構について記述する。


X=92625
X=92620
Y=-66000
Y=-66005
Y=-66010
Y=-66015
SK2
SP32
SP31
SP30
SP28
SP27
SP26
SP21
SP29
SP19
SP20
SP24
SP25
SP22
SP23
未 掘 部
SP18
SP33
SP15
SP14
SP16
SP17
現代坑
SP13
SP12
SD2
現代坑
現代坑
A
SP11
SP8
現代坑
SP10
SP9
SK6
SD1
SK5
SK3
SB1
SP5
現代坑
SP4
SP7
SK1
SP2
SP3
SK4
SP1
現代坑
現代坑
B
SP6
C
0
5m
(S=1：100)

第6図　遺構配置図



第７図　ＳＢ１測量図（１）

（１）弥生時代

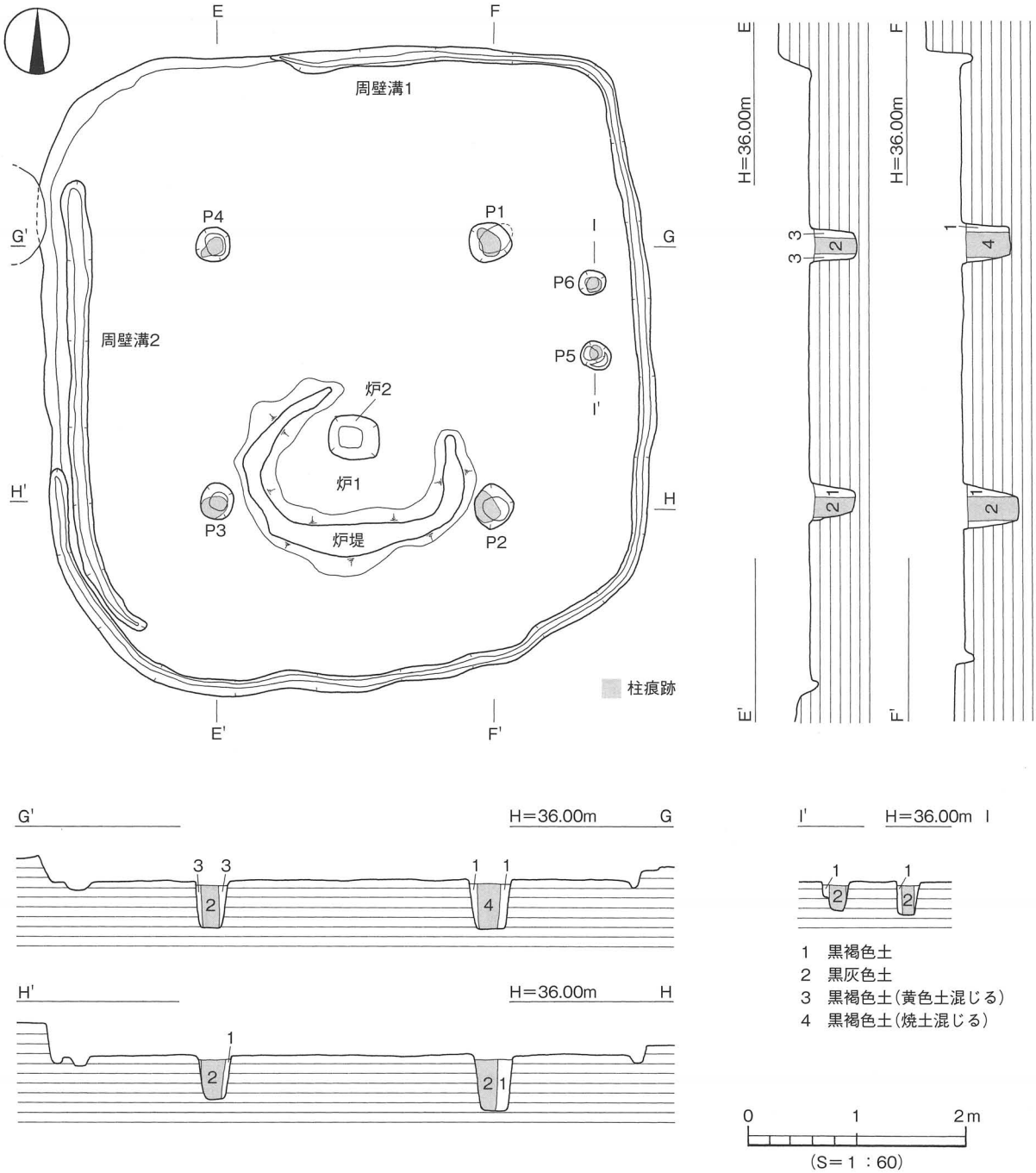
弥生時代の遺構は竪穴住居１棟、土坑５基のほか柱穴がある。

竪穴住居（ＳＢ）

ＳＢ１（第７、８図）

調査区中央部の西側で検出した。平面形は隅丸方形を呈する。検出規模は長軸（南北）5.88m、短軸（東西）5.55m、壁高0.42mを測る。埋土は黒褐色土である。住居内施設としては主柱穴、柱穴、炉址、周壁溝を検出した。このほか、住居北西隅の床面上に白色粘土を検出し、住居床面上から埋土中にかけては焼土を多く検出している。貼床とみられる施設は検出しなかった。

主柱穴はＰ１～Ｐ４までの４基である。規模は柱間2.30～2.60m、直径30～38cm、深さ40～54cmを測る。住居内の南東に位置するＰ２が最も深く掘られている。柱痕跡は４基とも検出している。柱



第８図　ＳＢ１測量図（２）

痕跡の平面形は楕円形を呈する。埋土色はＰ２、Ｐ３、Ｐ４が黒灰色土。Ｐ１は黒褐色土（焼土混じる）である。

柱穴は、住居東側の中央やや北よりに壁体に沿って南北方向に並ぶ２基（Ｐ５、Ｐ６）を検出した。規模は柱間60cm、直径20～24cm、深さ24～30cmを測る。柱痕跡は２基とも検出し、平面形は円形を呈している。

炉址は住居中央部のやや南側、主柱穴であるＰ２、Ｐ３の間に位置する。盛土による炉堤と浅い土坑（炉１）と深い土坑（炉２）とで構成される。炉堤はＡＴ火山灰を含む褐色粘質土を使用して炉１の周囲に築かれている。東西方向に長く、平面形態は楕円形を呈する。北東部は途切れている。規模は長軸（東西）2.14m、短軸（南北）1.50m、幅20～55cm、厚さ２～６cmを測る。

炉１は炉堤の内側を浅く掘られている部分である。深さは住居床面より６cmを測る。ほぼ全体に厚さ１cm程度の炭床層がみられた。炉２は炉１内の中央北側に掘られた土坑である。平面形は隅丸方形を呈する。規模は長軸（東西）46cm、短軸（南北）40cm、深さ36cmを測る。埋土は、灰によって粘質土化していた。

周壁溝は、２条を確認している。壁体に沿って掘られた周壁溝１と西側の周壁溝１の住居内側に沿って掘られた周壁溝２である。周壁溝１は、住居北西部の西壁から北壁にかけて途切れている。規模は幅９～16cm、深さ６～10cmを測る。周壁溝２の幅は、周壁溝１より広い。規模は幅12～24cm、深さ10cmを測る。

白色粘土は住居北西隅の床面上で検出した。床として貼られた様子はなく凸凹の塊状となっている。規模は東西1.00m、南北0.50mの範囲となり厚さは0.01～0.05mを測る。

焼土は、床面直上から埋土中にかけて検出している。主柱穴Ｐ１の北側、Ｐ１とＰ２の間、Ｐ３とＰ４の間、Ｐ４の周囲に多く分布する。炭化材は、焼土の上下や周辺に散在した状態で検出しているが元の形を正確に復元しえるものではなかった。

出土遺物（第９、10図）

甕形土器（１～９）

１～３は外反する口縁部片。３の口縁端部は下方に肥厚する。４は肩の張りが弱く外反する口縁部。５は肩の張りが弱く直口気味にたちあがる口縁部。６、７は小さな平底の底部。８の底部はやや凹む小さな平底。９の底部はやや突出した丸みを帯びた不安定な底部である。

壺形土器（10～18）

10は外反して開く口縁部。口縁端部は上方に短くのびる。11～15は長頸壺である。11、12は外反する口縁部。13は外傾して外上方にのびる口縁部である。14、15はやや外傾し直立気味にたちあがる口縁部である。16は頸部以上が欠失する。胴部はやや扁球である。底部はやや突出した平底。胴部外面に丁寧なヘラミガキが施されている。全体的に精緻な造りである。17は平底の底部片。18は内外面ともハケ目調整が施される。底部内面に指頭痕を残す。

鉢形土器（19～31）

19は大型の鉢の口縁部片。20は水平気味に大きく外反する口縁部。21は小さく外反する口縁部。22の口縁部は外上方にのびる。23は胴部から緩やかに外に開く口縁部。24は短く上方にのびる口縁部。口縁端部は尖り気味である。25～28は直口口縁の鉢である。25、28の底部は平底。27は突出したやや上げ底の底部。29、30は扁球形の胴部に小さく突出する底部。29の外面にはヘラミガキが施される。31は脚付の鉢。脚部に円孔をもつ。内面に朱が付着する。

ミニチュア土製品（32）

口縁部は欠失する。底部は平底。

高坏形土器（33）

33は外反する口縁部。内外面ともハケ目調整が施される。

器台形土器（34）

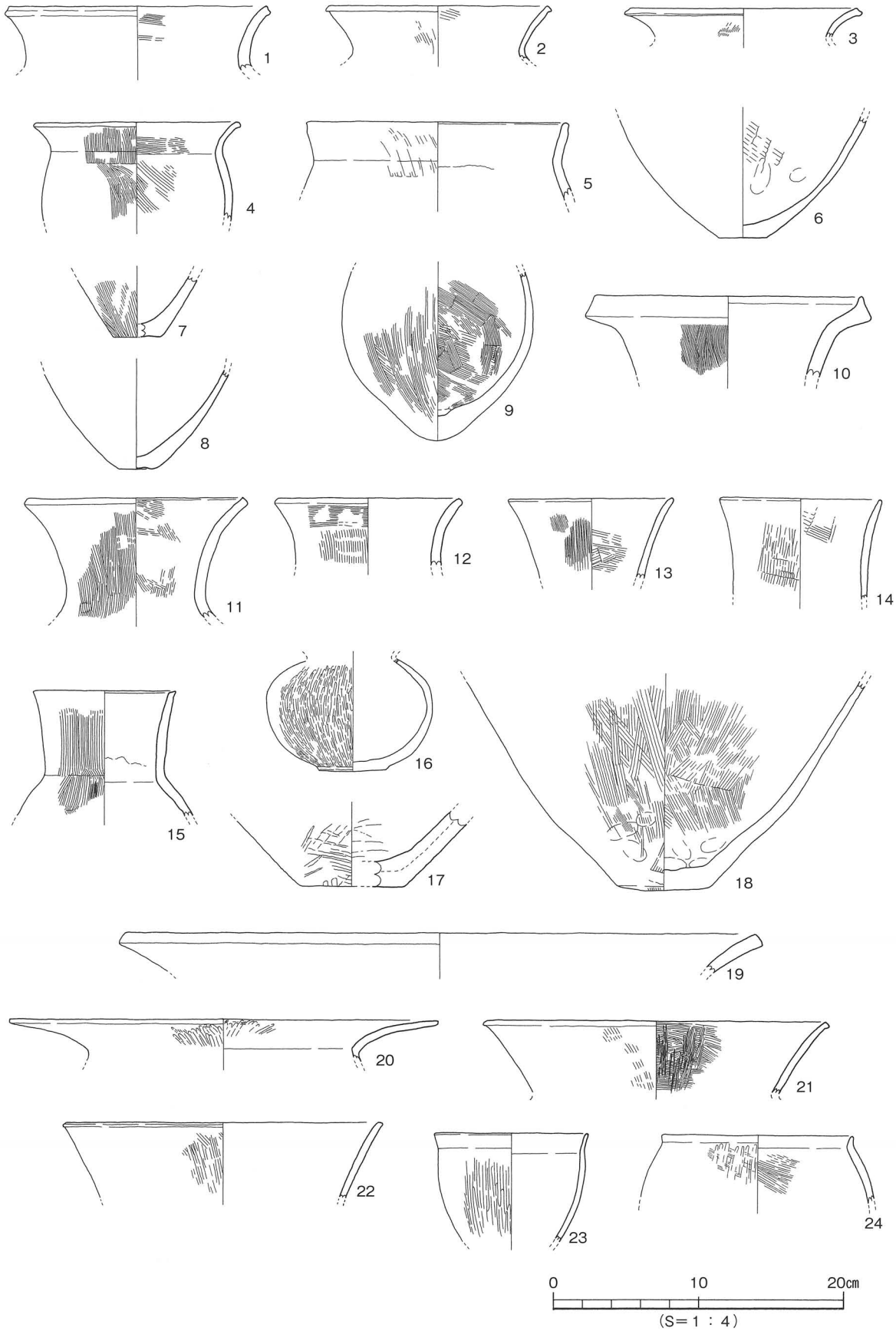
受部の端部は拡張されヘラ描沈線文と浮文が施される。

鉄製品（35）

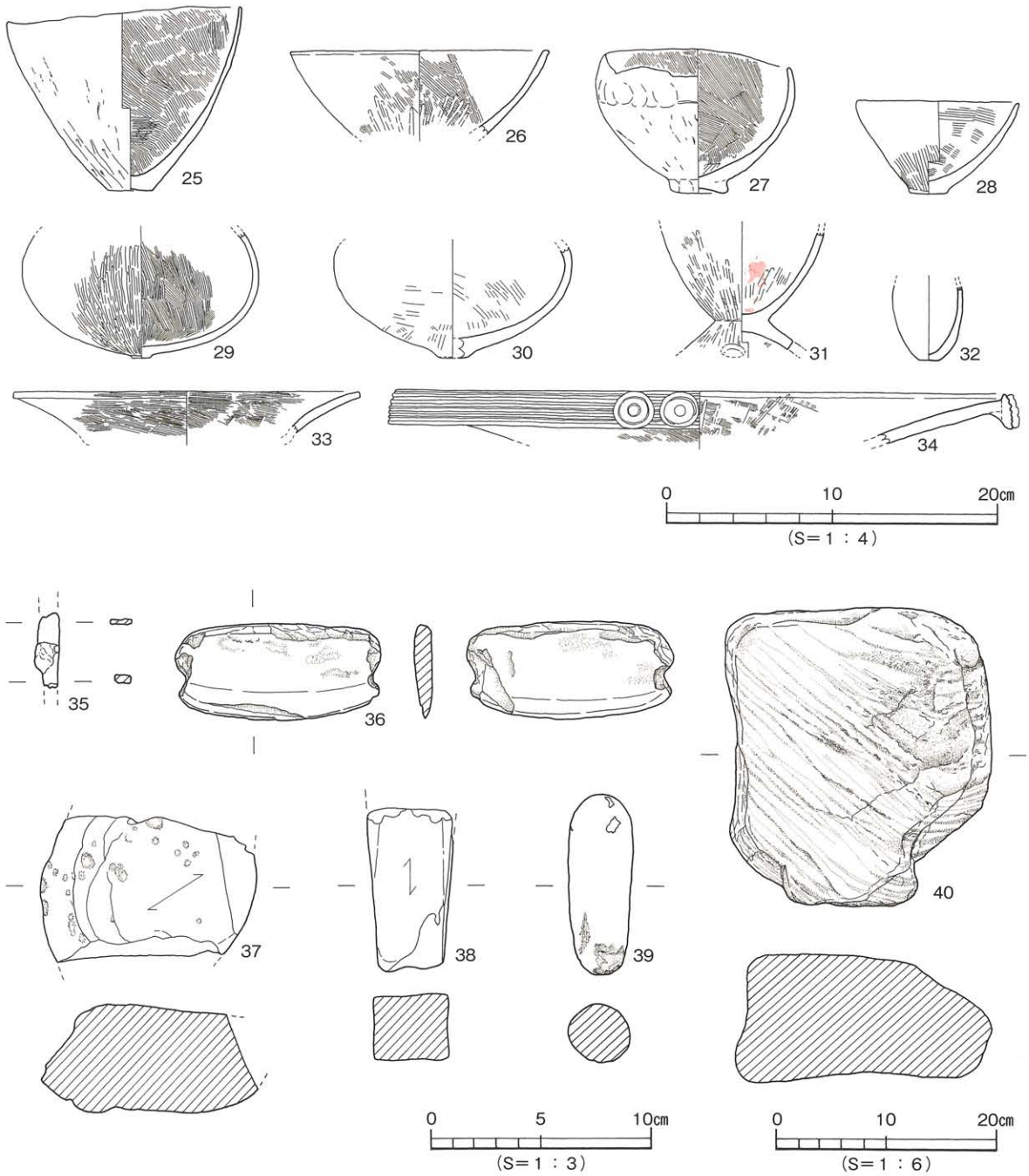
35は有茎式鏃の茎部の破片である。

石製品（36～40）

36は両端に抉りをもつ直背外湾刃形の石包丁。37、38は砥石。39は敲石。40は台石である。



第９図　ＳＢ１出土遺物実測図（１）

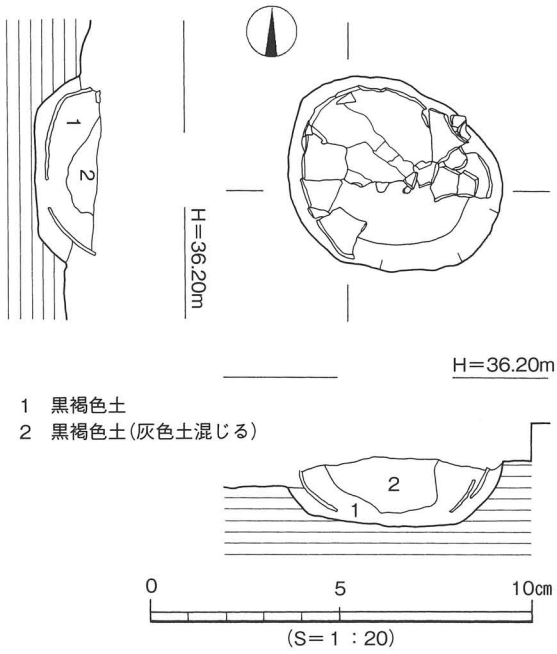


第10図　ＳＢ１出土遺物実測図（２）

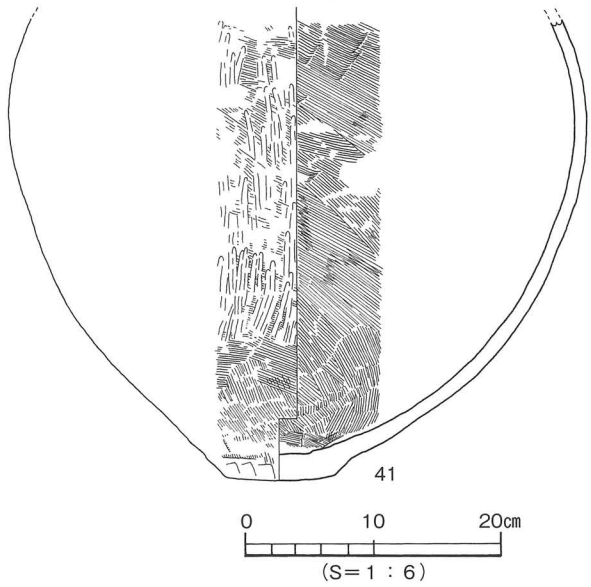
土坑（ＳＫ）

ＳＫ２（第11図）

調査区東部での検出である。現代の耕作によって遺構上部が失われている。平面形態は楕円形を呈する。検出規模は長軸（東西）0.55m、短軸（南北）0.50m、深さ0.14～0.18mを測る。埋土は黒褐色土と黒褐色土（灰色土混じる）である。黒褐色土（灰色土混じる）は現代の撹乱層である。遺物は大型の壺が出土している。壺は現代の削平のため上部と土坑の南東部で抜き取られるように失われている。底部は、土坑の北西部で検出されたことから口縁部を南東方向に向けて、横に倒置された状態であったことが推察される。



第11図　ＳＫ２測量図



第12図　ＳＫ２出土遺物実測図

出土遺物（第12図、41）

41の口縁部は欠失。胴中位に最大径をもつ。底部はやや突出する不安定な平底である。

ＳＫ３（第13図）

調査区北西部での検出である。北側は調査区外へとつづく。現代の耕作によって上部は失われている。検出規模は長軸（東西）0.66m、短軸（南北）0.26m、深さ0.08mを測る。埋土は黒褐色土である。遺物は、削平によってほとんどが失われていたが土坑底には壺の胴部が遺存していた。

ＳＫ４（第13図）

平面形は楕円形を呈する。長軸（東西）0.80m、短軸（南北）0.62m、深さ0.31mを測る。埋土は黒褐色土である。

出土遺物（第14図、42）

42は高坏。脚部と坏部の接合部片である。

ＳＫ５（第13図）

調査区の北側中央部での検出である。平面形は不整形である。検出規模は長軸（東西）1.24m、短軸（南北）0.94m、深さ0.19mを測る。埋土は黒褐色土である。

出土遺物（第14図、43）

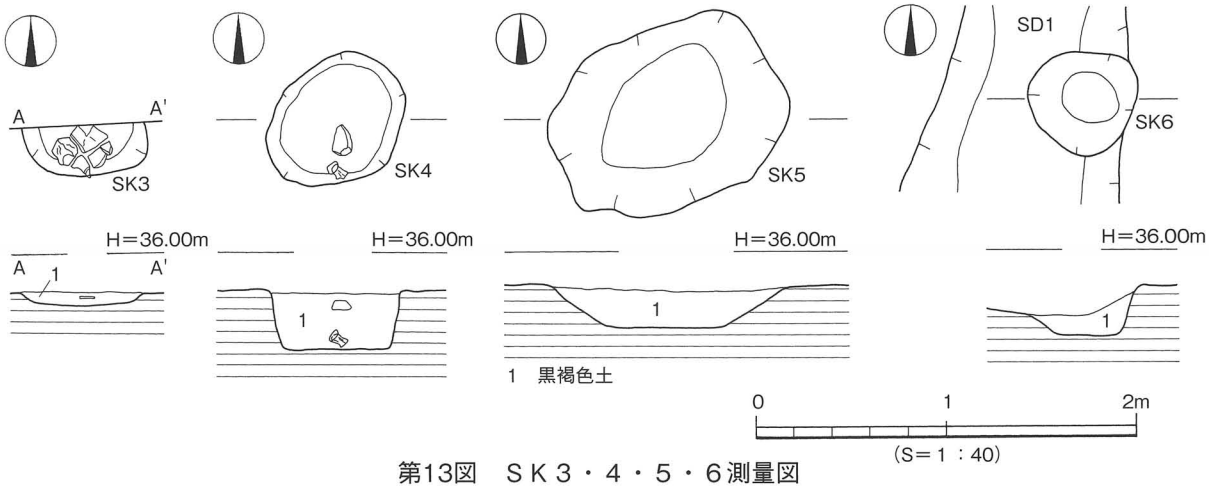
43は鉢。口縁部は短く外に開く。口縁端部は面をもつ。

ＳＫ６（第13図）

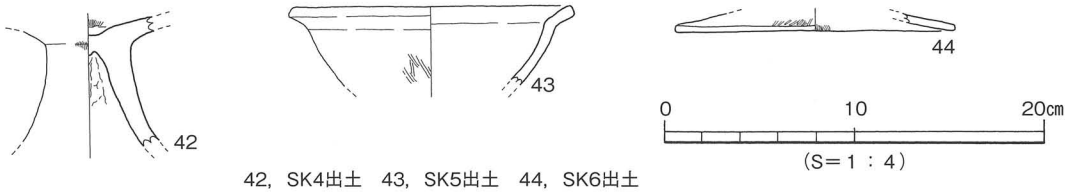
調査区中央部での検出である。中世の溝ＳＤ１に切られる。平面形は円形を呈する。検出規模は直径0.54m、深さ0.28mを測る。埋土は黒褐色土である。

出土遺物（第14図、44）

44は台付鉢の脚裾と考えられる。外面に丁寧なヘラミガキが施される。



第13図　ＳＫ３・４・５・６測量図



第14図　ＳＫ４・５・６出土遺物実測図

（２）古墳時代

古墳時代の遺構は、溝１条を検出した。

溝（ＳＤ）

ＳＤ２（第15図）

調査区の北東部から南西方向へとのびる溝である。弥生時代の竪穴住居であるＳＢ１を切る。溝の北側には西方向にのびる小溝がとりついている。埋土も同一であり切り合い関係も認められないことからＳＤ２に付随する溝と考えられる。検出規模は未掘部を除いた北側が長さ2.61m、南側が8.08m、幅1.70～2.42m、深さ0.38mを測る。埋土は暗灰色粗砂に粘質砂が混入している。遺物は弥生土器、土師器、須恵器、石器、鉄器が出土している。出土した土器は小片で摩滅しているものが多い。弥生時代中期末から古墳時代中期までの遺物が出土している。土師器は小片のため図示できなかった。

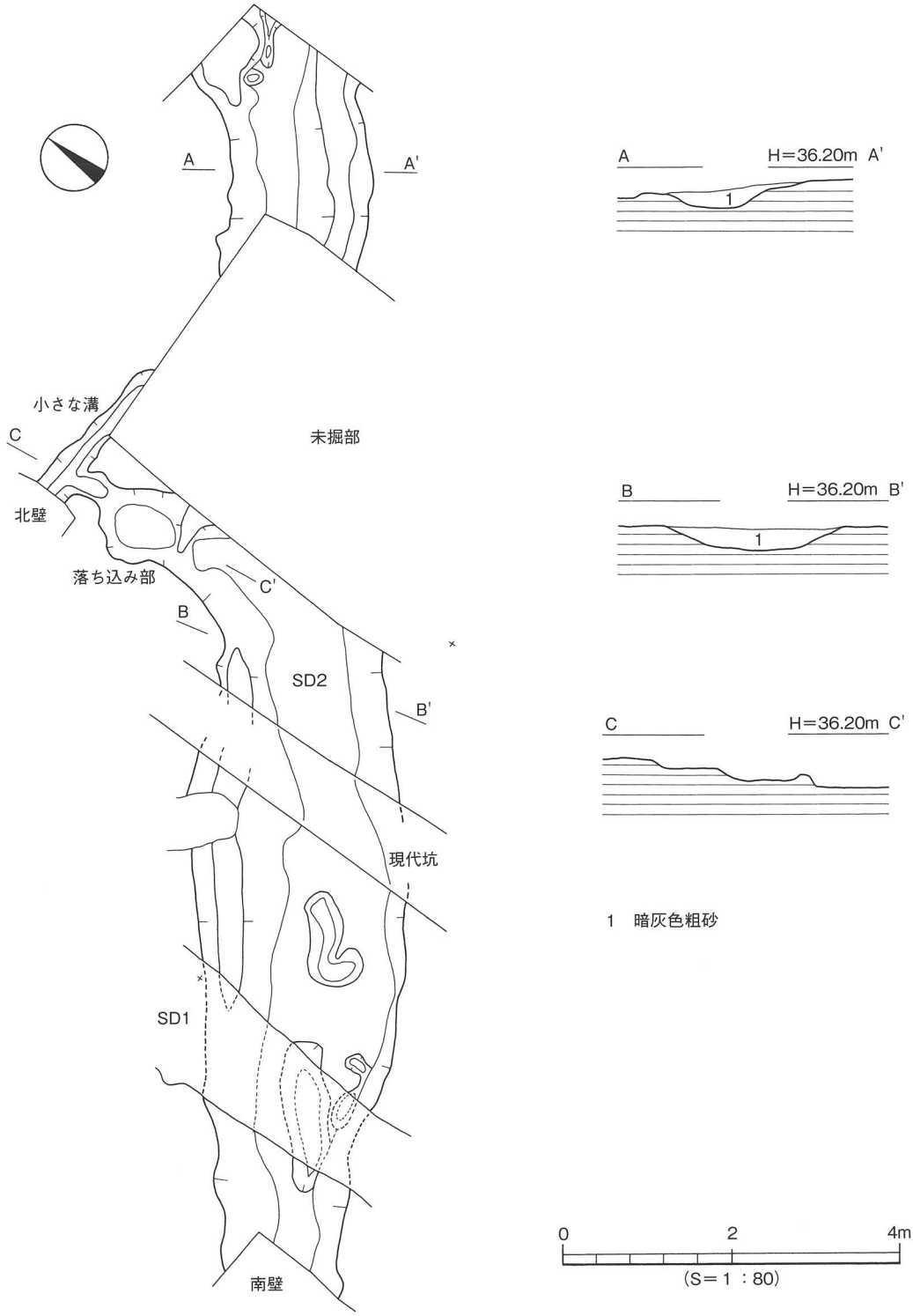
出土遺物（第16図）

弥生土器（45～55）

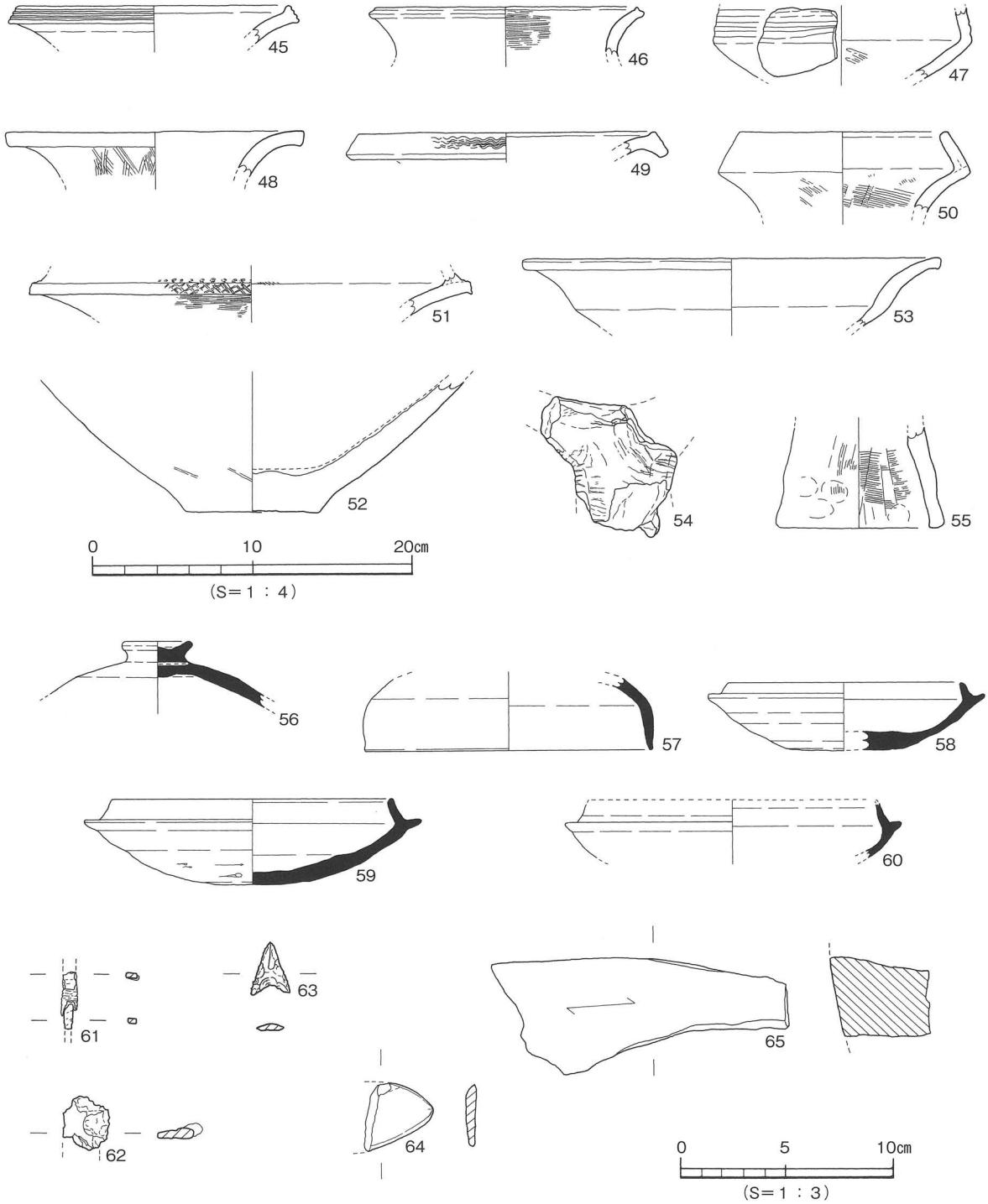
45～47弥生後期末の土器である。45、46は壺形土器。45の口縁端部は拡張され凹線文が施される。46の口縁端部は凹む。47は高坏。口縁部外面に凹線文が施される。48～55は弥生後期の土器である。48～52は壺形土器。48の口縁部外面はハケ目調整が施される。49は口縁端部外面に波状文が施される。50、51は複合口縁壺。50の接合部は「く」字状に屈曲する。口縁部外面は無文である。51は接合部片。接合部は「コ」字状となり面をもつ。接合部端面に刻目文、上面に半裁竹管文を施す。52は突出する平底の底部である。53は高坏。外反する口縁部。端部は面をもつ。54、55は支脚。54は角付きの支脚。55は脚裾部である。

須恵器（56～60）

56、57は蓋である。56のつまみ中央部は凹む。57は天井部が欠失。口縁端部は尖り気味。58～60は坏身である。受部は水平にのびる。たちあがりは内傾し、端部は丸くおさめる。



第15図　ＳＤ２測量図



第16図　ＳＤ２出土遺物実測図

鉄製品（61、62）

61は鉄鏃。茎部の破片である。62は不明品。

石製品（63～65）

63は石鏃。材質はサヌカイトである。64は石包丁の破片。直材質は頁岩である。65は台石の破片である。使用痕が見られる。

（3）中世

溝（ＳＤ）

ＳＤ１（第17図）

調査区の中央部を南北方向に走る溝である。溝の北側は調査区内で切れておさまる。南側は調査区外へとのびている。古墳時代の溝ＳＤ２と弥生時代の竪穴住居ＳＢ１を切る。断面形態は逆台形を呈する。検出規模は長さ9.00m、幅1.45m、深さ0.16mを測る。埋土は黄灰色土である。遺物は弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、陶磁器が出土している。瓦器、土師器は小片のため図示できるものはなかった。

出土遺物（第18図）

弥生土器（66～68）

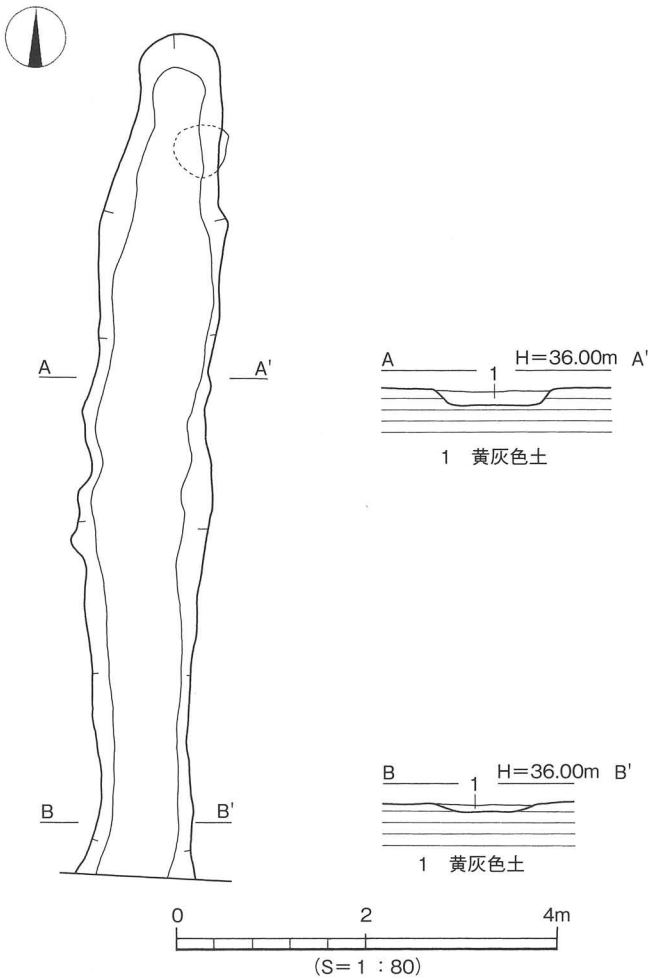
66は甕形土器。口縁部は外上方に開く。端部は面をもつ。67、68は壺形土器。67は外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。68は口縁端部を上下に拡張し端部外面に波状文を施す。

須恵器（69）

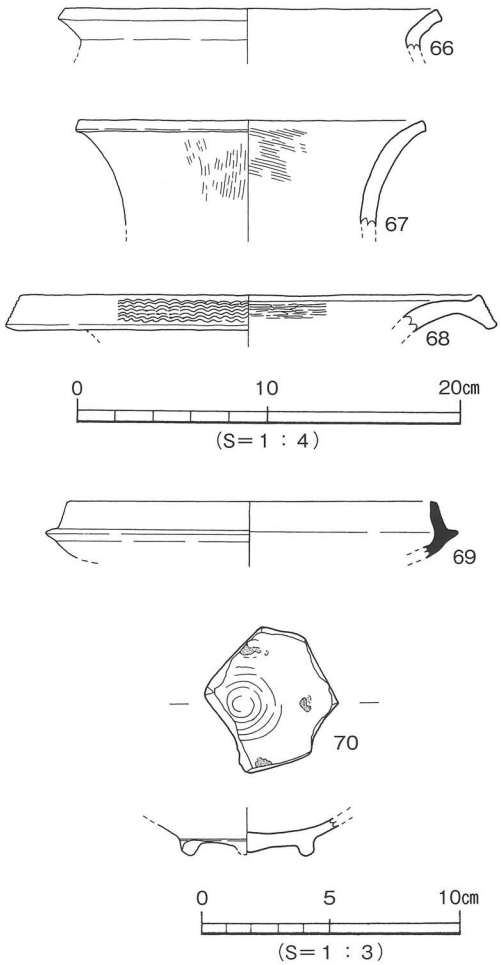
69は坏身。たちあがりは内傾して短く上方にのびる。端部は丸い。受部は水平にのびる。

白磁（70）

見込みに胎土目痕を残す。高台は４箇所に抉りを入れている。



第17図　ＳＤ１測量図



第18図　ＳＤ１出土遺物実測図

土坑（ＳＫ）

ＳＫ１（第19図）

調査区の北西部で検出した土坑である。北側は調査区外となる。平面形は隅丸方形を呈するものと考えられる。検出規模は長軸（東西）1.50m、短軸（南北）0.94m、深さ0.17mを測る。遺構埋土は黄灰色土である。遺物は土師器、瓦器、青磁、備前焼が出土している。土師器、瓦器、青磁は小片のため図示できるものが無かった。

出土遺物（第20図、71）

71は備前焼のすり鉢の底部である。すり目が９条看取される。

柱穴（ＳＰ）

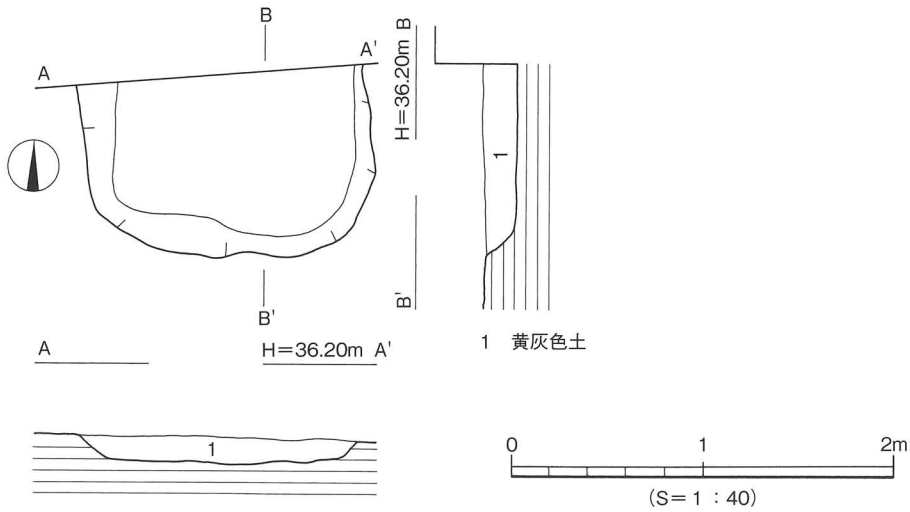
柱穴は30基を検出している。埋土は、黄灰色土と暗灰色土の二色に分けられる。切り合い関係は、黄灰色土が暗灰色土を切っており黄灰色土が新しい事を確認している。しかしながら柱穴の埋土からは遺物が出土しないものが多く、出土しても小片のため図示できるものが少ない。

ＳＰ１（第21図）

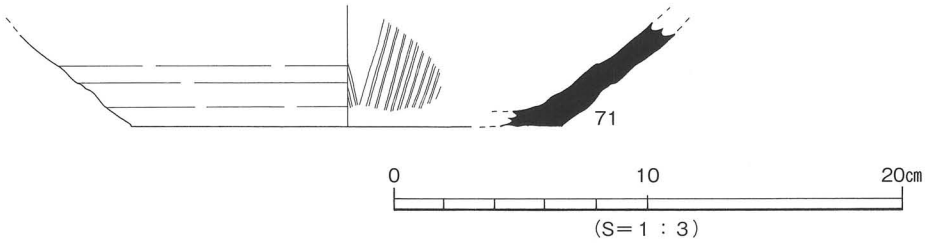
調査区北西部での検出である。平面形は円形を呈する。検出規模は直径0.18m、深さ0.12mを測る。埋土は黄灰色土である。柱痕跡は検出していない。遺物は出土していない。

ＳＰ２（第21図）

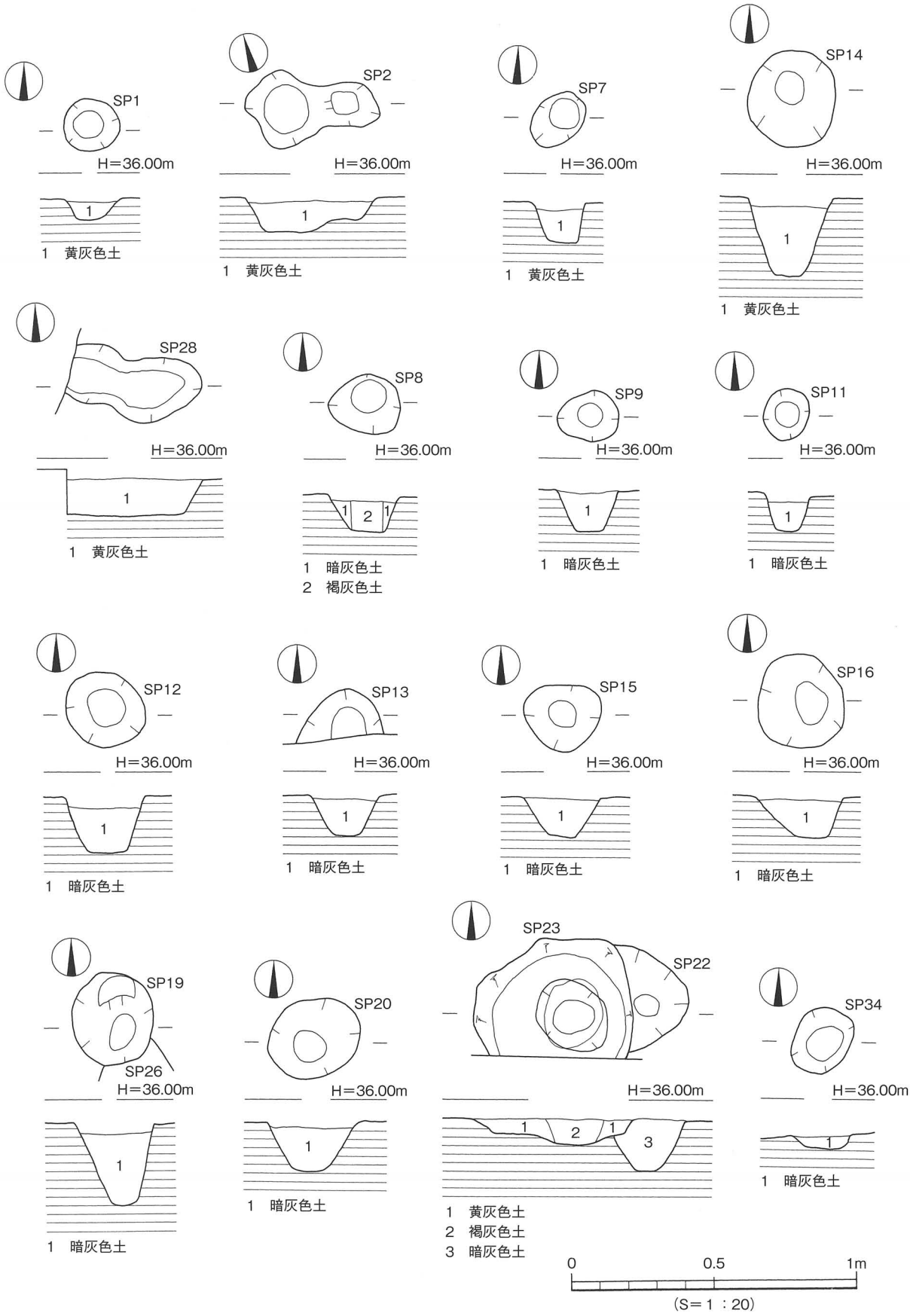
調査区北西部での検出である。平面形は不整形を呈する。検出規模は長軸（東西）0.48m、短軸（南北）0.16m、深さ0.10mを測る。埋土は黄灰色土である。柱痕跡は検出していない。遺物は弥生土器、土師器が出土している。



第19図　ＳＫ１測量図



第20図　ＳＫ１出土遺物実測図


SP1
H=36.00m
1 黄灰色土
SP2
H=36.00m
1 黄灰色土
SP7
H=36.00m
1 黄灰色土
SP14
H=36.00m
1 黄灰色土
SP28
H=36.00m
1 黄灰色土
SP8
H=36.00m
1 暗灰色土
2 褐灰色土
SP9
H=36.00m
1 暗灰色土
SP11
H=36.00m
1 暗灰色土
SP12
H=36.00m
1 暗灰色土
SP13
H=36.00m
1 暗灰色土
SP15
H=36.00m
1 暗灰色土
SP16
H=36.00m
1 暗灰色土
SP19
SP26
H=36.00m
1 暗灰色土
SP20
H=36.00m
1 暗灰色土
SP23
SP22
H=36.00m
1 黄灰色土
2 褐灰色土
3 暗灰色土
SP34
H=36.00m
1 暗灰色土
0
0.5
1m
(S=1：20)

第21図　柱穴測量図

出土遺物（第22図、72・73）

72、73は土師器坏。底部は欠失している。72の口縁端部は肥厚し丸くおさめる。73はやや内湾して外上方に開く口縁部。端部は丸くおさめる。

ＳＰ７（第21図）

調査区南西部で検出した。平面形は楕円形を呈する。検出規模は長軸0.20m、短軸0.16m、深さ0.12mを測る。埋土は黄灰色土である。柱痕跡は検出していない。遺物は弥生土器、土師器、瓦器が出土している。

出土遺物（第22図、74）

74は瓦器椀。底部は欠失。外面に指頭痕を残す。

ＳＰ８（第21図）

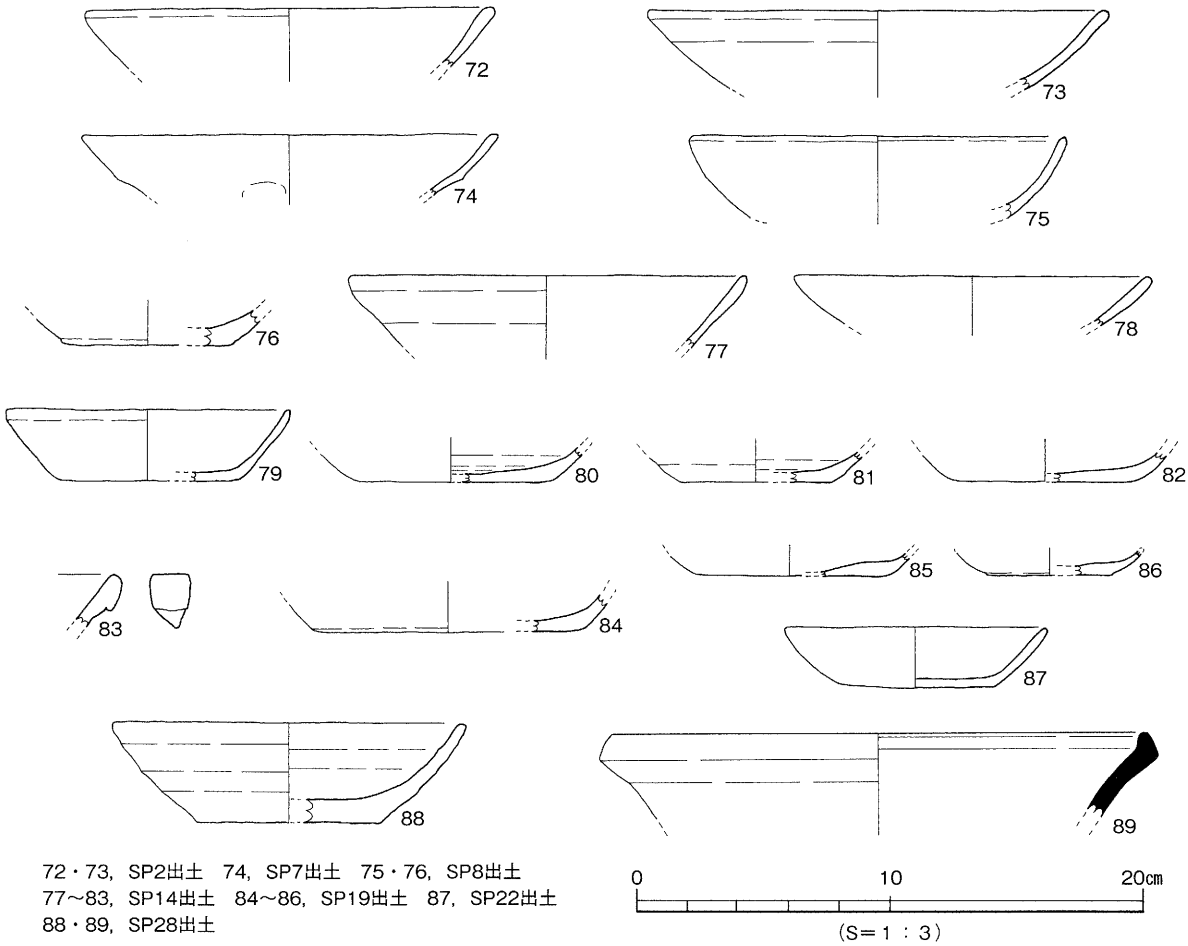
調査区南部での検出である。平面形は円形を呈する。検出規模は直径0.24m、深さ0.12mを測る。埋土は暗灰色土である。柱痕跡を検出している。遺物は土師器、瓦器が出土している。

出土遺物（第22図、75・76）

75、76は土師器坏。75の口縁端部は丸くおさめる。76の底部の切り離しは回転糸切りである。

ＳＰ９（第21図）

調査区南部で検出した。平面形は円形を呈する。検出規模は直径0.20m、深さ0.14mを測る。埋土は暗灰色土である。遺物は出土していない。



第22図　柱穴出土遺物実測図

ＳＰ11（第21図）

調査区南部で検出した。平面形は円形を呈する。検出規模は直径0.18m、深さ0.10mを測る。柱痕跡は検出していない。埋土は暗灰色土である。遺物は弥生土器の小片が出土している。

ＳＰ12（第21図）

調査区南部で検出した。平面形は円形を呈する。検出規模は直径0.28m、深さ0.16mを測る。埋土は暗灰色土である。柱痕跡は検出していない。遺物は弥生土器、須恵器、土師器の小片が出土している。

ＳＰ13（第21図）

調査区南部で検出した。平面形は円形を呈する。検出規模は直径0.30m、深さ0.13mを測る。埋土は暗灰色土である。柱痕跡は検出していない。遺物は土師器、弥生土器が出土している。

ＳＰ14（第21図）

調査区南部で検出した。平面形は円形を呈する。検出規模は直径0.32m、深さ0.24mを測る。埋土は黄灰色土である。柱痕跡は検出していない。遺物は土師器、須恵器、弥生土器が出土している。

出土遺物（第22図、77～83）

77～82は土師器坏。底部の切り離しは81、82とも回転糸切りである。他は摩滅のため不明。83は白磁碗。口縁は玉縁である。

ＳＰ15（第21図）

調査区南部で検出した。平面形は円形を呈する。検出規模は直径0.26m、深さ0.14mを測る。埋土は暗灰色土である。柱痕跡は検出していない。遺物は出土していない。

ＳＰ16（第21図）

調査区南部での検出である。平面形は円形を呈する。検出規模は直径0.30m、深さ0.13mを測る。埋土は暗灰色土である。柱痕跡は検出していない。遺物は土師器、瓦器、弥生土器が出土している。

ＳＰ19（第21図）

調査区南部での検出である。平面形は円形を呈する。検出規模は直径0.28m、深さ0.25mを測る。埋土は暗灰色土である。柱痕跡は検出していない。遺物は土師器、瓦器、弥生土器が出土している。

出土遺物（第22図、84～86）

84～86は土師器坏の底部片である。底部の切り離しは摩滅のため不明。

ＳＰ20（第21図）

調査区南部での検出である。平面形は円形を呈する。検出規模は直径0.32m、深さ0.16mを測る。埋土は暗灰色土である。柱痕跡は検出していない。遺物は土師器、瓦器、弥生土器が出土している。

ＳＰ22（第21図）

調査区南部での検出である。平面形は不整形を呈する。検出規模は長軸0.34m、短軸0.20m、深さ0.18mを測る。埋土は暗灰色土である。柱痕跡は検出していない。遺物は土師器、瓦器、弥生土器が出土している。

出土遺物（第22図、87）

87は土師器坏。底部の切り離しは回転糸切りである。

ＳＰ23（第21図）

調査区南部での検出である。南側は調査区外となる。平面形は不整形を呈する。検出規模は長軸0.56m、短軸0.44m、深さ0.09mを測る。埋土は黄灰色土である。柱痕跡は検出していない。遺物は弥生土器、土師器、瓦器が出土している。

ＳＰ28（第21図）

調査区南部で検出した。平面形は不整形である。検出規模は長軸0.46m、短軸0.14m、深さ0.13mを測る。埋土は黄灰色土である。柱痕跡は検出していない。遺物は須恵器、土師器が出土している。

出土遺物（第22図、88・89）

88は土師器坏。底部の切り離しは回転糸切りである。89は東播系のこね鉢である。

ＳＰ34（第21図）

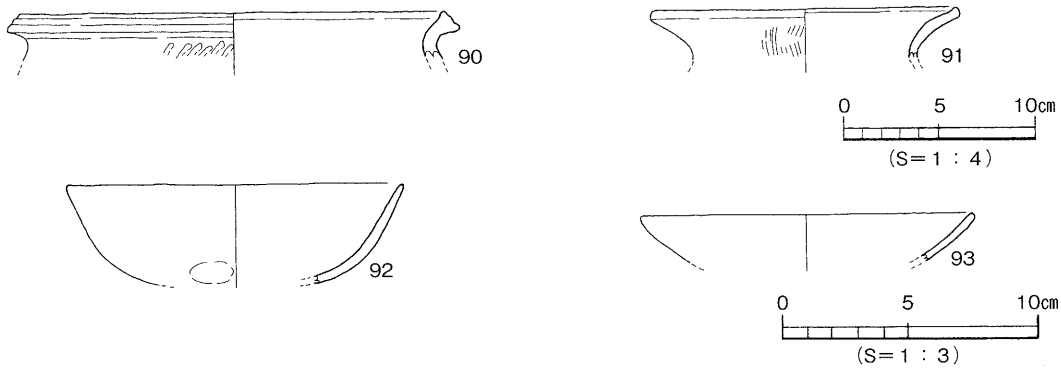
調査区南部で検出した。ＳＤ１に切られる。平面形は不整形である。検出規模は長軸0.24m、短軸0.20m、深さ0.05mを測る。埋土は暗灰色土である。柱痕跡は検出していない。遺物は土師器が出土した。

（４）表採遺物

遺構検出時に出土した遺物である。弥生土器、瓦器、土師器がある。

出土遺物（第23図、90～93）

90、91は弥生土器の甕形土器である。90の口縁端部は拡張され凹線文が施される。91の口縁部は外反する。92は瓦器椀。93は土師器坏である。



第23図　表採遺物実測図

第５節　小結

今回の調査では、弥生時代から中世の遺構・遺物を検出した。弥生時代の遺構には竪穴住居１棟と土坑５基がある。竪穴住居ＳＢ１は、平面形態が隅丸方形を呈する。主柱穴は４本で構築され、施設として周壁溝と炉が付属している。焼土や炭化材の検出状況から焼失住居と考えられる。時期は、出土遺物より弥生時代後期後半である。検出した竪穴住居は平面形態、周壁溝、炉の構築法など竪穴住居の構造解明に必要な資料となるものであった。土坑は５基を検出している。このうちＳＫ２、ＳＫ３からは破片ながら大型の壺が出土しており、埋葬施設である壺棺の可能性が高い。

古墳時代では溝ＳＤ２を検出している。このＳＤ２は、東部環状線の建設に伴い行われた東本遺跡４次調査で検出されたＳＤ301の延長線上にあり、出土遺物からの時期比定も同時期のため同一の遺構と考えている。

中世では土坑、柱穴、溝を検出している。周辺遺跡においても中世の集落関連の遺構・遺物が確認されており本調査地にも集落域が広がる事が確認された。

遺構・遺物一覧　―凡例―

（1）以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。
遺構一覧、遺物観察表は相原浩二、岩本美保、村上真由美、佐伯利枝が作成した。

（2）遺物観察表の各掲載について。

法　量　欄　（　）：復元推定値

形態・施文欄　土器の各部位名称を略記。
例）口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部～底部

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。
例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。（　）の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。
例）石・長（1～3）→「1～3㎜の石英・長石を含む」である。
焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

遺物観察表

表1　ＳＢ１出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
1	甕	口径（18.2） 残高　4.4	外反する口縁部。口縁端部は下方に肥厚する。	[口端]ヨコナデ ナデ	ハケ（6～9本/cm） →ナデ	橙色 橙色	石・長（1～3） ◎		
2	甕	口径（15.5） 残高　3.8	外反する口縁部。口縁端部は下方に肥厚する。	[口端]ヨコナデ ハケ（5～6本/cm） →ナデ	ハケ（5～6本/cm） →ナデ	にぶい橙色 明赤褐色	石・長（1～2） ◎		
3	甕	口径（16.4） 残高　2.0	外反する口縁部。口縁端部は下方に肥厚する。	[口端]ヨコナデ ハケ→ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長（1～3） 金 ◎		
4	甕	口径（14.2） 残高　6.8	外反する口縁部。肩部の張りは弱い。	[口端]ナデ ハケ（9本/cm）→ ナデ	ハケ（7本/cm）→ ナデ	明赤褐色 橙色	石・長（1～2） 金 ◎		
5	甕	口径（18.2） 残高　5.4	内湾して短く上方にたちあがる口縁部。肩部の張りは弱い。	ハケ→ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長（1～4） ◎		
6	甕	底径　（3.4） 残高　8.4	底部から内湾してたちあがる胴部。 底部は小さな平底。	ナデ	ハケ（4本/cm）→ ナデ	にぶい褐色 橙色	石・長（1～3） 金 ◎	黒斑	
7	甕	底径　（3.2） 残高　4.2	平底の底部。	ハケ（7本/cm）→ ナデ [底]ナデ	ナデ	明褐色 にぶい橙色	石・長（1～3） 金 ◎	黒斑	
8	甕	底径　2.6 残高　6.9	中央がやや凹む平底の底部。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 明褐色	石・長（1～4） 金 ◎		
9	甕	残高　11.6	底部は丸味を帯びた小さな平底。	ハケ（8本/cm）→ ナデ [底]ナデ	ハケ（8本/cm）→ ナデ	橙色 橙・灰褐色	石・長（1～5） 金 ◎	黒斑	
10	壺	口径（19.6） 残高　5.6	外反する口縁部。口縁端部は上方に短くのびる。	[口端]ヨコナデ ハケ（20本/cm）	[口端]ヨコナデ ナデ	橙色 黒褐色	石・長（1～3） 金 ◎		
11	壺	口径（15.3） 残高　8.2	長頸壺。口縁部は外反する。口縁端部は面をもつ。	[口端]ナデ [口]ハケ（10本/cm）	ハケ→ナデ	橙色 にぶい橙色	石・長（1～4） 金 ◎		
12	壺	口径（12.9） 残高　4.7	長頸壺。口縁部は外反する。口縁端部は面をもつ。	[口端]ナデ ハケ（7本/cm）→ ナデ	ナデ	浅黄橙色 にぶい黄橙色	石・長（1～2） ◎	黒斑	
13	壺	口径（11.3） 残高　5.5	長頸壺。外反して立ち上がる口縁部。口縁端部は丸く仕上げる。	[口]ヨコナデ ハケ（6本/cm）→ ナデ	[口]ヨコナデ ハケ（6本/cm）→ ナデ	橙色 明褐色	石・長（1～3） ◎		

ＳＢ１出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
14	壺	口径（11.1） 残高　6.9	長頸壺。外反して立ち上がる口縁部。	[口端]ヨコナデ ハケ(6～8本/cm)→ナデ	[口端]ヨコナデ [口]ハケ(4～6本/cm)→ナデ [頸]ナデ	橙・にぶい橙色 橙・にぶい橙色	石・長(～1) ◎		
15	壺	口径　(9.8) 残高　8.5	長頸壺。やや外反して立ち上がる口縁端部。口縁端部は面をもつ。	[口]ヨコナデ ハケ(7本/cm)	ナデ	橙色 橙色	石・長(1～5) 金 ◎		
16	壺	底径　4.2 残高　7.7	扁球形の胴部。底部は平底。	ハケ→ヘラミガキ [底]ナデ	ナデ	にぶい褐色 暗灰色	石・長(1～5) 金 ◎	黒斑	7
17	壺	底径　(7.1) 残高　5.3	平底の底部。	タタキ	ナデ	にぶい赤褐色 にぶい褐色	石・長(1～2) 金 ◎		
18	壺	底径　6.4 残高　14.7	平底の底部。胴部は外上方にのびる。	ハケ(6本/cm)→ナデ	ハケ(6本/cm)→ナデ	にぶい黄橙色 にぶい橙色・黒褐色	石・長(1～3) 金 ◎	黒斑	7
19	鉢	口径（44.2） 残高　2.7	大型品。外上方に開く口縁端部。	マメツ	マメツ	橙色 橙・暗灰黄色	石・長(1～8) 多褐色粒 △		
20	鉢	口径（29.5） 残高　2.8	大きく外反し水平気味にのびる口縁部。	[口端]ヨコナデ ミガキ	ハケ(7本/cm)→ミガキ	橙・にぶい橙色 橙・にぶい橙色	石・長(～1) ◎		
21	鉢	口径（23.8） 残高　5.0	外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。	[口端]ヨコナデ ハケ→ヨコナデ	ハケ(9本/cm)→ナデ	明赤褐色 橙色	石・長(1～2) 金 ◎		
22	鉢	口径（22.0） 残高　5.2	外上方にのびる口縁部。口縁端部は面をもつ。	[口端]ヨコナデ ハケ(6本/cm)→ヨコナデ	ナデ	にぶい褐色 にぶい褐・褐灰色	石・長(～2) ◎		
23	鉢	口径（10.5） 残高　7.5	短く外に開く口縁部。	ミガキ	ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長(1～2) ◎	黒斑	
24	鉢	口径（13.2） 残高　4.6	短く外に開く口縁部。口縁端部は尖り気味。	ハケ→ミガキ	[口]ナデ ハケ(6本/cm)→ナデ	にぶい黄橙色 にぶい橙色	石・長(1～2) 金 ◎		
25	鉢	口径　14.2 底径　2.6 器高　11.1	内湾して上方に立ち上がる口縁部。器壁は薄い。底部は小さな平底。不安定な底部。	ナデ	ハケ(10本/cm)	にぶい橙色 にぶい橙・橙・灰白色	石・長(1～2) ◎	二次的焼成痕あり	7
26	鉢	口径（15.6） 残高　5.1	内湾して上方に立ち上がる口縁部。口縁端部は面をもつ。	[口]ヨコナデ ハケ(7～9本/cm)→ミガキ	[口]ヨコナデ ハケ(7～9本/cm)→ミガキ	橙色 橙色	石・長(1～2) ◎		
27	鉢	口径　11.2 底径　3.5 器高　8.7	内湾する口縁部。底部は突出する。不安定な底部。	ナデ	ハケ(6本/cm)→ナデ	橙・にぶい橙色 橙・にぶい橙色	石・長(1～2) 金 ◎	黒斑	7
28	鉢	口径　(9.8) 底径　2.4 器高　5.8	内湾して上方に立ち上がる口縁部。端部は尖り気味。底部はやや突出した平底。	ハケ(6本/cm)→ナデ [底]ナデ	ハケ(6本/cm)→ナデ	浅黄橙色 にぶい橙色	石・長(1～3) 金 ◎	黒斑	
29	鉢	底径　1.3 残高　7.5	扁球形の胴部。小さく突出する底部。	ヘラミガキ [底]ナデ	ハケ(15本/cm)	明赤褐色 灰黄褐色	石・長(1～2) ◎	黒斑	7
30	鉢	底径　(1.8) 残高　6.7	小さく突出する底部。	ハケ(4～5本/cm)→ナデ [底]ナデ	ハケ(4～5本/cm)→ナデ	橙・明赤褐色 橙・明赤褐色	石・長(1～4) ◎		
31	鉢	残高　7.1	脚付の鉢。脚部に4方向の透かし有り。	[坏]ハケ(10～11本/cm)→ミガキ [脚]ミガキ	[坏]ミガキ [脚]ハケ(8～9本/cm)→ナデ	褐灰・灰色 にぶい橙・灰褐色	石・長(～1) ◎	朱付着	
32	鉢	底径　1.1 残高　4.6	ミニチュア土器。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長(1) ◎		
33	高坏	口径（21.0） 残高　2.6	外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。	ハケ(14本/cm)→ナデ	ハケ(14本/cm)→ナデ	橙色 橙色	石・長(1～2) ◎		
34	器台	口径（37.0） 残高　3.1	受部の端部は上下に拡張しヘラ描沈線文と浮文を施す。	[口端]ナデ [口]ハケ(6～7本/cm)	ハケ(6～7·15本/cm)→ミガキ	明赤褐・橙色 明赤褐・橙色	石・長(1～3) 金 ◎	黒斑	7

表２　ＳＢ１出土遺物観察表　鉄製品

番号	器　種	残　存	材　質	法　量				備　考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
35	鏃	茎部の一部	鉄	3.4	0.7～1.0	0.2～0.4	2.462		7

表３　ＳＢ１出土遺物観察表　石製品

番号	器　種	残　存	材　質	法　量				備　考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
36	石包丁	ほぼ完形	緑色片岩	9.3	4.4	0.8	61.52	直背外湾刃形	7
37	砥石	欠損	堆積岩	(8.8)	(6.2)	4.8	512.41		8
38	砥石	一部欠損	白色凝灰岩	7.4	3.5	3	129.76		8
39	敲石	ほぼ完形	砂岩	8.2	2.9	2.65	93.7		8
40	台石	完形	堆積岩	27.0	23.1	13.2	13600		8

表４　ＳＫ２出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形　態　・　施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
41	壺	底径　8.6 残高　37.0	張りのある胴部。底部はやや突出する丸味を帯びた平底。	[胴]ハケ(4～5本/cm) [胴上・中]ハケ→ミガキ [底]ナデ(工具痕あり)	ハケ(4～5本/cm) [底](工具痕あり)	橙・にぶい橙色 灰・灰黄色	石・長(1～3) ◎		8

表５　ＳＫ４出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形　態　・　施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
42	高坏	残高　6.8	坏部中央が凹む。	マメツ(一部ハケ)	[坏]ヘラミガキ [脚]ナデ	明赤褐色 橙色	石・長(1～5) ◎		

表６　ＳＫ５出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形　態　・　施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
43	鉢	口径（15.0） 残高　4.2	口縁部は外上方に開く。	マメツ(一部ハケ→ナデ)	マメツ	にぶい橙色 橙色	石・長(1～4) ◎		

表７　ＳＫ６出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形　態　・　施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
44	鉢	底径（14.8） 残高　0.9	台付鉢の脚裾部。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1) 金 ◎		

表８　ＳＤ２出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量（cm）	形　態　・　施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
45	壺	口径（18.0） 残高　2.4	口縁端部は上下に拡張する。口縁端部に凹線文を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	明赤褐色 にぶい黄橙色	石・長(1～4) ◎		
46	壺	口径（17.0） 残高　3.2	外反する口縁部。口縁端部は凹む。	ナデ	ハケ(10本/cm)	にぶい黄橙色 にぶい橙色	石・長(～3) ◎		

ＳＤ２出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
47	高坏	残高　4.4	口縁部外面に凹線文を施す。	ナデ(一部工具痕あり)	ヨコナデ [坏底]ミガキ	明赤褐・にぶい赤褐色 黒褐色	石・長(1～3) ◎		
48	壺	口径（18.6） 残高　2.9	外反して水平に開く口縁部。口縁端部は面をもつ。	ハケ→ナデ	ナデ	明褐色 橙・褐灰色	石・長(1～4) 金 ◎		
49	壺	口径（20.0） 残高　1.7	口縁端部外面に波状文を施す。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 浅黄橙色	石・長(1～2) 金 ◎		
50	壺	口径（13.0） 残高　5.1	複合口縁壺。接合部は「く」字状を呈する。	マメツ (一部ハケ(6～8本/cm))	[拡]ヨコナデ [口]ハケ(6～8本/cm)	にぶい橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～2) ◎		
51	壺	残高　2.7	複合口縁壺。接合部は「コ」字状を呈する。接合部端面に刻目文。上面に半裁竹管文を施す。	ハケ(5～6本/cm)	マメツ(一部ハケ(5～6本/cm))	にぶい橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～3) ◎		
52	壺	底径　8.4 残高　8.3	やや突出する平底の底部。	マメツ(工具痕あり)	ハクリの為不明	橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～3) 多 ◎		
53	高坏	口径（26.0） 残高　4.3	外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい橙色	石・長(1～5) 金 ◎	黒斑	
54	支脚	残高　9.4	突起がつく支脚。背面にも突起がつく。円孔をもつ。	タタキ→ナデ	ナデ	にぶい橙色 橙色	石・長(1～3) 金 ◎		
55	支脚	底径（10.4） 残高　6.4	裾部。脚端は面をもつ。	ナデ(一部工具痕あり)	ハケ(6～9本/cm) →ナデ	橙・にぶい橙・暗灰色 暗灰色	石・長(1～2) ◎		
56	坏蓋	つまみ径（3.2） 残高　3.1	つまみ中央部は凹む。	[つまみ]回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色 灰色	長(～1) ◎		8
57	坏蓋	口径（13.4） 残高　4.4	口縁端部は尖り気味。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	石・長(1) ◎		8
58	坏身	口径（10.8） 底径　(5.5) 器高　3.2	受部は上方にのびる。立ち上がりの端部は丸く仕上げる。	回転ヘラケズリ [口]回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1) ◎		8
59	坏身	口径（13.0） 底径　(5.0) 器高　4.0	受部は水平にのびる。立ち上がりは内傾する。端部は丸く仕上げる。	回転ヘラケズリ [口]回転ナデ	回転ナデ	黄灰色 黄灰色	石・長(1～5) ◎		8
60	坏身	残高　2.5	受部は水平にのびる。立ち上がりは内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(～1) ◎		8

表９　ＳＤ２出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
61	鏃	茎部	鉄	2.8	0.4～0.6	0.2	1.735		8
62	不明	欠損	鉄	2.5	1.5	0.5	4.964		

表10　ＳＤ２出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
63	石鏃	ほぼ完形	サヌカイト	2.5	1.3	0.3	0.904		8
64	石包丁	不明	頁岩	3.3	2.9	0.4	5.478		8
65	台石	不明	砂岩	13.9	5.4	4.5	340.51		

表11　ＳＤ１出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整		色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
66	甕	口径（20.0） 残高　2.2	外上方にのびる口縁部。口縁端部は面をもつ。	ナデ	ナデ	赤褐色 赤褐色	石・長(1～3.5) ◎		
67	壺	口径（18.2） 残高　5.6	長頸壺。外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。	[口端]ヨコナデ ハケ(6本/cm)→ ナデ	[口端]ヨコナデ ハケ(6本/cm)→ ナデ	橙色 橙色	石・長(1～2) ◎		
68	壺	口径（25.6） 残高　2.0	口縁端部は拡張される。口縁端部に波状文を施す。	[拡]ナデ ハケ(8本/cm)→ ナデ	ミガキ	灰黄褐色 にぶい褐色	石・長(1～3) ◎		
69	坏身	口径　14.5 残高　2.2	立ち上がりは内傾する。端部は丸くおさめる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	微砂 ◎		
70	碗	底径　(5.2) 残高　1.5	見込みに胎土目の痕跡と切り離し痕跡。高台は４ヶ所に抉りを入れる。	施釉の為不明	施釉の為不明	灰黄色 灰黄色	微砂 ◎	白磁	

表12　ＳＫ１出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整		色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
71	すり鉢	底径(16.8) 残高　4.2	すり目は９条。	回転ナデ [底]ナデ	ナデ	灰色 灰黄褐色	石・長(1～7) ◎	備前焼	

表13　ＳＰ２出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整		色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
72	坏	口径(16.1) 残高　2.4	口縁端部はやや肥厚し丸くおさめる。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 灰黄褐色	微砂 金 ◎		
73	坏	口径(18.1) 残高　3.1	口縁端部はやや内湾し丸くおさめる。	マメツ	マメツ	浅黄橙・灰褐色 浅黄橙・褐灰色	石・長(1) 金 ◎		

表14　ＳＰ７出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整		色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
74	椀	口径(16.3) 残高　2.4	瓦器。口縁端部は丸くおさめる。	マメツ	マメツ	灰・灰黄色 灰・灰黄色	微砂 ◎		

表15　ＳＰ８出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整		色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
75	坏	口径（14.8） 残高　3.2	口縁端部は丸くおさめる。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	微砂 ◎		
76	坏	底径　(6.8) 残高　1.4	底部片。	ヨコナデ [底]回転糸切り	ヨコナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	微砂 褐色粒 ◎		

表16　ＳＰ14出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整		色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
77	坏	口径（15.6） 残高　2.9	口縁端部は丸くおさめる。	ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	石・長(1～2) ◎		
78	坏	口径（14.0） 残高　2.0	口縁端部は丸くおさめる。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	石・長(1～2) ◎		

ＳＰ14出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
79	坏	口径（11.2） 底径（7.3） 器高 2.8	口縁端部は丸くおさめる。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白・褐灰色 灰白・灰黄褐色	石・長(1～2) ◎		
80	坏	底径（7.6） 残高 1.4	底部片。	不明	ヨコナデ	にぶい黄橙色 橙・灰白色	長(～1) ◎		
81	坏	底径（6.0） 残高 1.2	底部片。	マメツ [底]回転糸切り	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長(1) ◎		
82	坏	底径（7.0） 残高 1.2	底部片。	回転ナデ [底]回転糸切り	回転ナデ	浅黄色 灰白色	石・長(1) ◎		
83	碗	残高 2.1	玉縁口縁。	回転ナデ→施釉	回転ナデ→施釉	灰黄色 灰黄色	微砂 ◎	白磁	

表17　ＳＰ19出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
84	坏	底径（10.9） 残高 1.4	底部片。	ヨコナデ	マメツ	灰色 灰白色	長(～1) ◎		
85	坏	底径（7.4） 残高 1.0	底部片。	マメツ	マメツ	浅黄橙色 灰白色	石・長(1) ◎		
86	坏	底径（4.9） 残高 1.0	底部片。	ナデ	ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長(1～2) 金 ◎		

表18　ＳＰ22出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
87	坏	口径（10.3） 底径 6.1 器高 2.4	口縁部は外上方にのびる。口縁端部は丸くおさめる。	ヨコナデ [底]回転糸切り →板状圧痕あり	ヨコナデ	灰白色 灰白色	石・長(1～2) 金 ◎		

表19　ＳＰ28出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
88	坏	口径（13.8） 底径 7.2 器高 3.9	内湾して外上方に立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。	ヨコナデ [底]回転糸切り	ヨコナデ	灰白色 灰白色	微砂 ◎		
89	こね鉢	口径（22.0） 残高 3.3	口縁端部は上方に拡張される。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	微砂 ◎	東播系	

表20　１区表採遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
90	甕	口径(23.7) 残高 2.5	口縁端部に凹線を施し、頸部に「ノ」字状文が施される。	マメツ	マメツ	橙色 にぶい橙色	石・長(1～3) ◎		
91	甕	口径(16.3) 残高 2.7	口縁端部は上方にのびる。	[口端]ナデ ハケ(5本/cm)→ ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長(1～4) 金 ◎		
92	椀	口径(13.2) 残高 3.9	瓦器。口縁端部は尖る。	マメツ	マメツ	褐灰色 灰・灰黄色	石・長(1～3) ◎		
93	坏	口径(13.1) 器高 1.9	口縁端部は尖り気味。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	石・長(1) ◎		

遺構観察表

表21　竪穴住居一覧

竪穴(SB)	時期	平面形	規　　模(m) 長さ(長軸)×幅(短軸)×深さ	主柱穴(本)	内部施設				埋　土	出土遺物	備　考
					高床部	貼り床	炉	周壁溝			
1	弥生	隅丸方形	5.88×5.55×0.42	4+2	−	−	○	○	黒褐色土	弥生・石器・鉄器	SD1・SD2に切られる

表22　溝一覧

溝(SD)	地区	断面形	規　　模(m) 長さ(長軸)×幅(短軸)×深さ	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	1区	逆台形	9.00×1.45×0.16	黄灰色土	弥生・土師・須恵・瓦器・陶器	中世	SB1を切る
2	1区	逆台形	北側2.61×1.70 南西側8.08×2.42×0.38	暗灰色粗砂粘質土	弥生・土師・須恵・鉄・石器	古墳	SB1を切る

表23　土坑一覧

土坑(SK)	地区	平面形	断面形	規　　模(m) 長さ(長軸)×幅(短軸)×深さ	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	1区	(隅丸方形)	逆台形状	1.50×0.94×0.17	黄灰色土	土師・瓦器・青磁・備前焼	中世	北側調査区外
2	1区	楕円形	逆台形状	0.55×0.50×0.14〜0.18	黒褐色土	弥生	弥生	
3	1区	(楕円)	レンズ状	0.66×0.26×0.08	黒褐色土	弥生	弥生	北側調査区外
4	1区	楕円形	逆台形状	0.80×0.62×0.31	黒褐色土	弥生	弥生	
5	1区	不整形	逆台形状	1.24×0.94×0.19	黒褐色土	弥生	弥生	
6	1区	円形	逆台形状	0.54×0.28	黒褐色土	弥生	弥生	SD1に切られる

表24　柱穴一覧

(1)

柱穴(SP)	地区	平面形	規　　模(m) 長さ(長軸)×幅(短軸)×深さ	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	1区	円形	0.18×0.12	黄灰色土		中世	
2	1区	不整形	0.48×0.16×0.10	黄灰色土	土師・弥生	中世	
3	1区	不整形	0.64×0.44×0.39	黄灰色土		中世	
4	1区	楕円形	0.28×0.20×0.17	黄灰色土		中世	
5	1区	円形	0.26×0.12	黄灰色土		中世	
6	1区	(円形)	0.22×0.16	黄灰色土		中世	西側調査区外
7	1区	楕円形	0.20×0.16×0.12	黄灰色土	瓦器・土師・弥生	中世	
8	1区	円形	0.24×0.12	暗灰色土	瓦器・土師	中世	
9	1区	円形	0.20×0.14	暗灰色土		中世	
10	1区	円形	0.20×0.17	暗灰色土		中世	
11	1区	円形	0.18×0.10	暗灰色土	弥生	中世	
12	1区	円形	0.28×0.16	暗灰色土	土師・須恵・弥生	中世	
13	1区	(円形)	0.30×0.13	暗灰色土	土師・弥生	中世	南側調査区外
14	1区	円形	0.32×0.24	黄灰色土	土師・須恵・弥生	中世	
15	1区	円形	0.26×0.14	暗灰色土		中世	
16	1区	円形	0.30×0.13	暗灰色土	瓦器・土師・弥生	中世	
17	1区	円形	0.14×0.10	暗灰色土		中世	
18	1区	円形	0.16×0.10	暗灰色土		中世	
19	1区	円形	0.28×0.25	暗灰色土	瓦器・土師・弥生	中世	SP26を切る
20	1区	円形	0.32×0.16	暗灰色土	瓦器・土師・弥生	中世	
21	1区	円形	0.26×0.28	黒褐色土			

柱穴一覧

(2)

柱穴(SP)	地区	平面形	規　　模(m) 長さ(長軸)×幅(短軸)×深さ	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
22	1区	不整形	0.34×0.20×0.18	暗灰色土	瓦器・土師・弥生	中世	SP23に切られる
23	1区	不整形	0.56×0.44×0.09	黄灰色土	瓦器・土師・弥生	中世	SP22を切る 南側調査区外
24	1区	円形	0.24×0.28	黒褐色土			
25	1区	(円形)	0.18×0.06	黒灰色土			南側調査区外
26	1区	円形	0.26×0.32	黄灰色土		中世	SP19に切られる
27	1区	楕円形	0.50×0.26×0.16	暗灰色土	石器	中世	根石あり
28	1区	不整形	0.46×0.14×0.13	黄灰色土	須恵・土師	中世	
29	1区	(円形)	0.24×0.26	暗灰色土		中世	
30	1区	楕円形	0.18×0.14×0.11	暗灰色土		中世	
31	1区	円形	0.80×0.19	黄灰色土		中世	
32	1区	円形	0.21×0.26	黒褐色土			
33	1区	楕円形	0.33×0.23×0.03	暗灰色土	土師・弥生	中世	
34	1区	楕円形	0.24×0.20×0.05	暗灰色土	土師	中世	SD1に切られ消滅

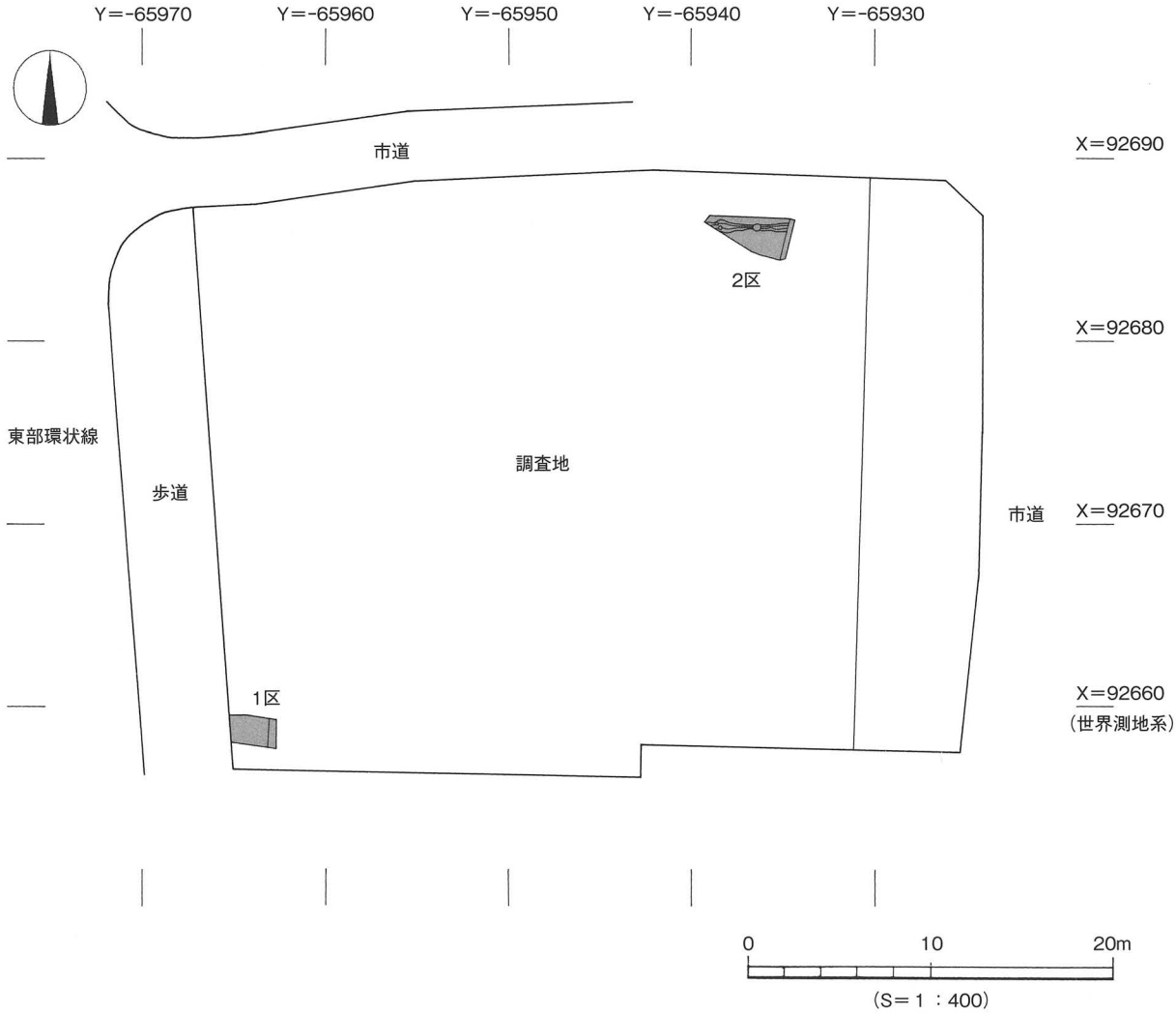
第３章　東本遺跡12次調査

第３章　東本遺跡12次調査

第１節　調査に至る経緯

2009（平成21）年５月19日、松山市東本一丁目119番１、120番２における店舗建設に伴う埋蔵文化財の確認願い（平成21年度申請36号）が、松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。申請地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地「№83　枝松遺物包含地」内にある。申請地西側の東部環状線では東本遺跡４次調査が行われ、松山市では最大級の周堤帯を伴う円形竪穴住居や銅鏡片が出土した円形竪穴住居などが見つかっている。

文化財課では、確認願いが提出された地番について遺跡の有無と、さらにはその範囲や性格を把握するために、試掘調査をする事となった。試掘調査は、財団法人松山市生涯学習振興財団　埋蔵文化財センター（以下、埋蔵文化財センター）が2009（平成21）年６月２日に行った。調査の結果、弥生時代の遺構・遺物が確認された。この結果を受け文化財課、埋蔵文化財センターと申請者は、発掘調査についての協議を行い、開発に伴って消失する遺跡に対して、記録保存のため本格調査を実施する



第24図　調査区位置図

事となった。なお、本格調査は東側隣地（平成21年度申請313号、東本一丁目119番１）の一部を含めて行うため、新たに埋蔵文化財の確認申請（平成21年度申請47号）が提出された。今回の調査は、この申請によるものである。申請面積は1,100.32㎡である。

第２節　調査の経過

（１）調査区の設定

試掘調査の結果、全域に遺跡が存在することが判明した。調査範囲は、遺跡保護の観点から店舗や関連施設の建築に伴い遺構に影響があると判断された箇所に限られた。そのため調査区は、西側の看板設置予定地を１区、東側の排水設備予定地を２区として調査を行った。地番は１区が東本一丁目120番２、２区は東本一丁目119番１である。調査面積は１区が約3.6㎡、２区が約６㎡の合計約9.6㎡となる。

（２）調査の経過

調査工程は以下である。

平成21年７月６日（月）　調査区を確認後、重機にて１区の約3.6㎡の掘削を行う。第Ⅴ層上面で遺構検出作業を行い、平面を精査する。東壁にトレンチを設定し、土層観察を行う。土層図を作成する。２区の掘削を重機にて行う。１区、２区とも重機による掘削を終了する。

７日（火）　２区の遺構検出作業を行い、平面を精査する。遺構検出作業の結果、溝１条、柱穴２基を検出する。検出状況の写真撮影を行う。遺構配置図の作成と遺構埋土色の確認作業を行う。ベルトを設定し遺構の掘り下げを開始する。２区壁面の土層図作成作業を行う。

８日（水）　１区では第Ⅴ層の掘り下げを行い、遺物の有無などを確認する。第Ⅵ層上面で遺構の確認作業を行う。

９日（木）　全体測量と２区の遺構測量図を作成する。測量図の作成後、２区の完掘状況の写真撮影を行う。

10日（金）　発掘用具の撤去作業と用具の洗浄を行う。遺物洗浄作業と図面整理作業などを行い東本遺跡12次調査作業を終了する。

第３節　層位

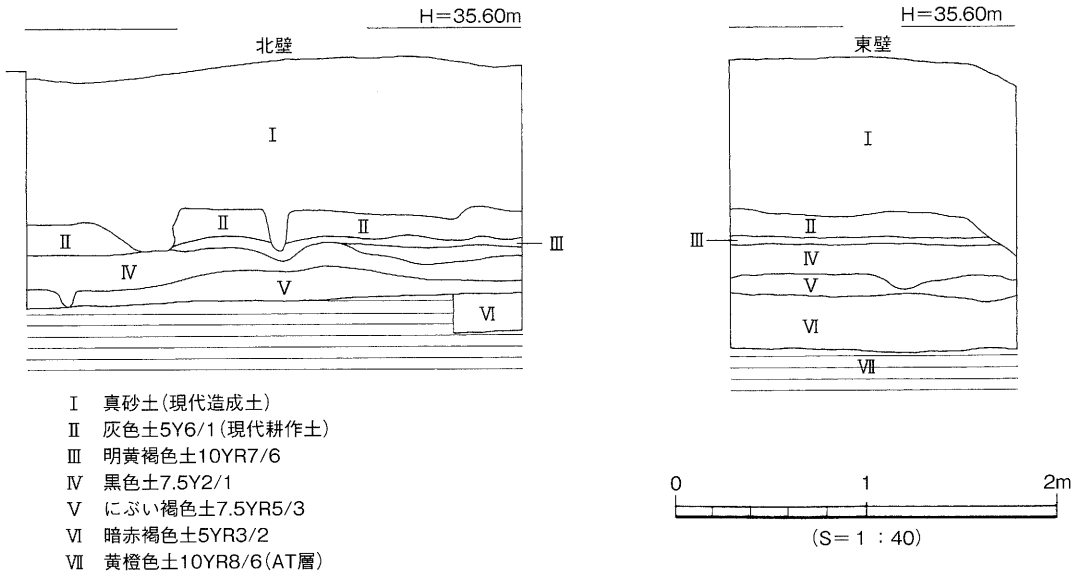
（１）１区の層位

調査地は、石手川によって形成された扇状地に立地している。調査地一帯はアカホヤ火山灰やＡＴ火山灰が広範に確認されている地域である。１区の基本層序は上から第Ⅰ層真砂土、第Ⅱ層灰色土、第Ⅲ層明黄褐色土、第Ⅳ層黒色土、第Ⅴ層にぶい褐色土、第Ⅵ層暗赤褐色土、第Ⅶ層黄橙色土である。第Ⅱ層は現代の耕作土、第Ⅲ層は第Ⅱ層の床土である。第Ⅲ層中に土器が混じる。第Ⅳ層以下では遺

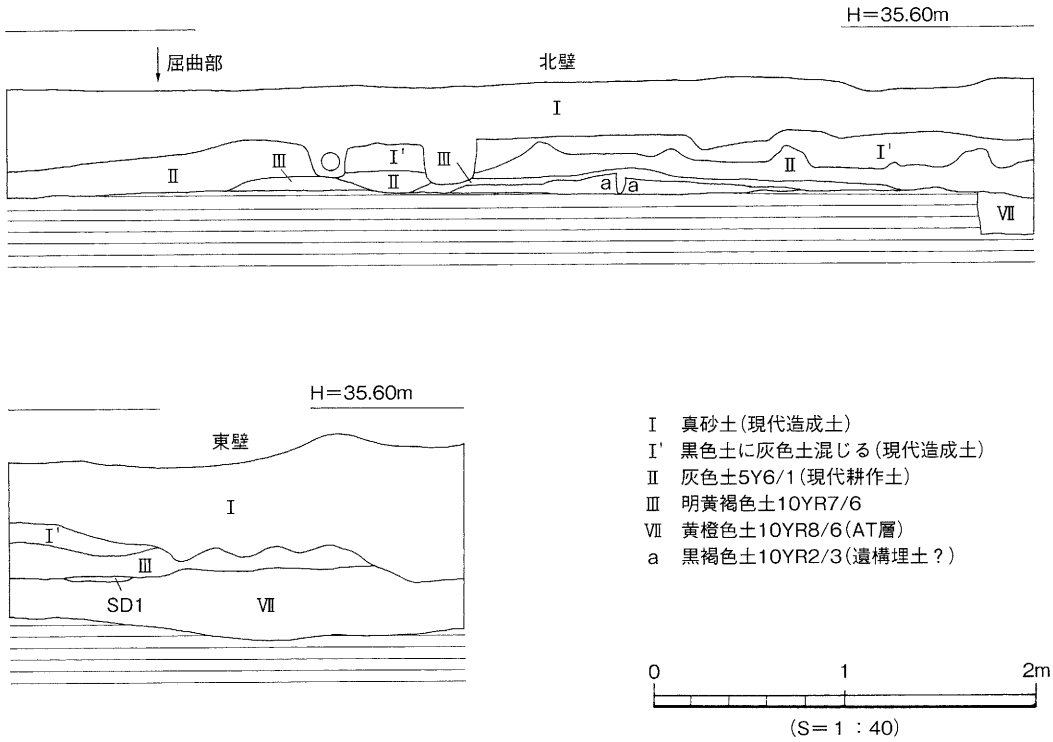
物は検出しなかった。第Ⅴ層、第Ⅶ層は、周辺域の調査成果より第Ⅴ層がアカホヤ火山灰層、第Ⅶ層はＡＴ火山灰の二次堆積層と考えられる。遺構の検出は第Ⅴ層上面と第Ⅵ層上面で行った。

（２）２区の層位

２区では１区でみられた第Ⅳ層、第Ⅴ層、第Ⅵ層が現代の削平によって失われている。層序は第Ⅰ



第25図　１区土層図



第26図　２区土層図

層真砂土、第Ⅰ'層黒色土に灰色土混じる、第Ⅱ層灰色土、第Ⅲ層明黄褐色土、第Ⅶ層黄橙色土である。北壁の第Ⅶ層上面には削平を免れた遺構埋土と思われる黒褐色土が遺存していた。遺構の検出は第Ⅶ層上面で行った。

第4節　遺構と遺物

調査は看板の基礎工事がおこなわれる部分を１区、排水設備の工事がおこなわれる部分を２区として調査を行った。１区では遺構は検出せず、２区では遺構を検出している。

（1）１区の調査

１区は調査地の南西隅にあたる。調査面積は約3.6㎡である。遺構は、第Ⅴ層上面と第Ⅵ層上面で確認作業を行ったが検出しなかった。遺物は、第Ⅲ層中より弥生土器が出土した。

出土遺物（第28図、94～96）

94、95は甕形土器。94は外方に開く口縁部。95は上げ底の底部である。96は鉢形土器。小さくボタン状に突出した底部である。

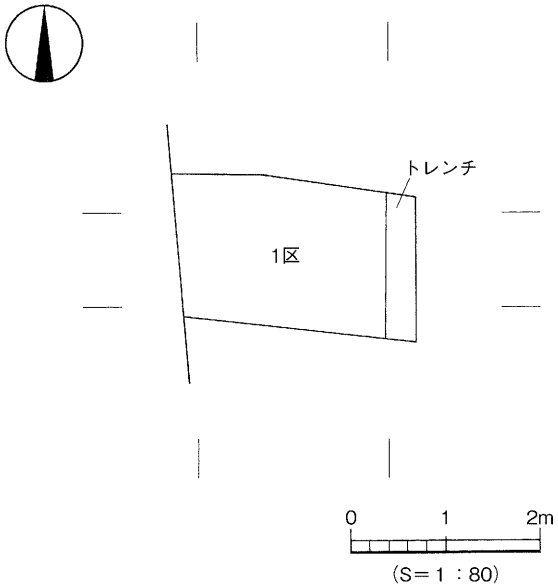
（2）２区の調査

２区は調査地の北東部にあたる。調査面積は約６㎡である。遺構は、第Ⅶ層上面で確認作業を行い溝１条（ＳＤ１）、柱穴２基を検出した。遺物は溝ＳＤ１より弥生土器と思われる小片が出土したのみである。柱穴からは遺物の出土は無かった。柱穴の時期は、埋土色より現代のものと思われる。以下、２区の遺構について記述する。

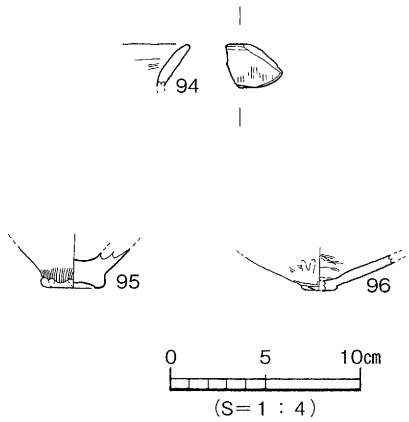
溝（ＳＤ）

ＳＤ１

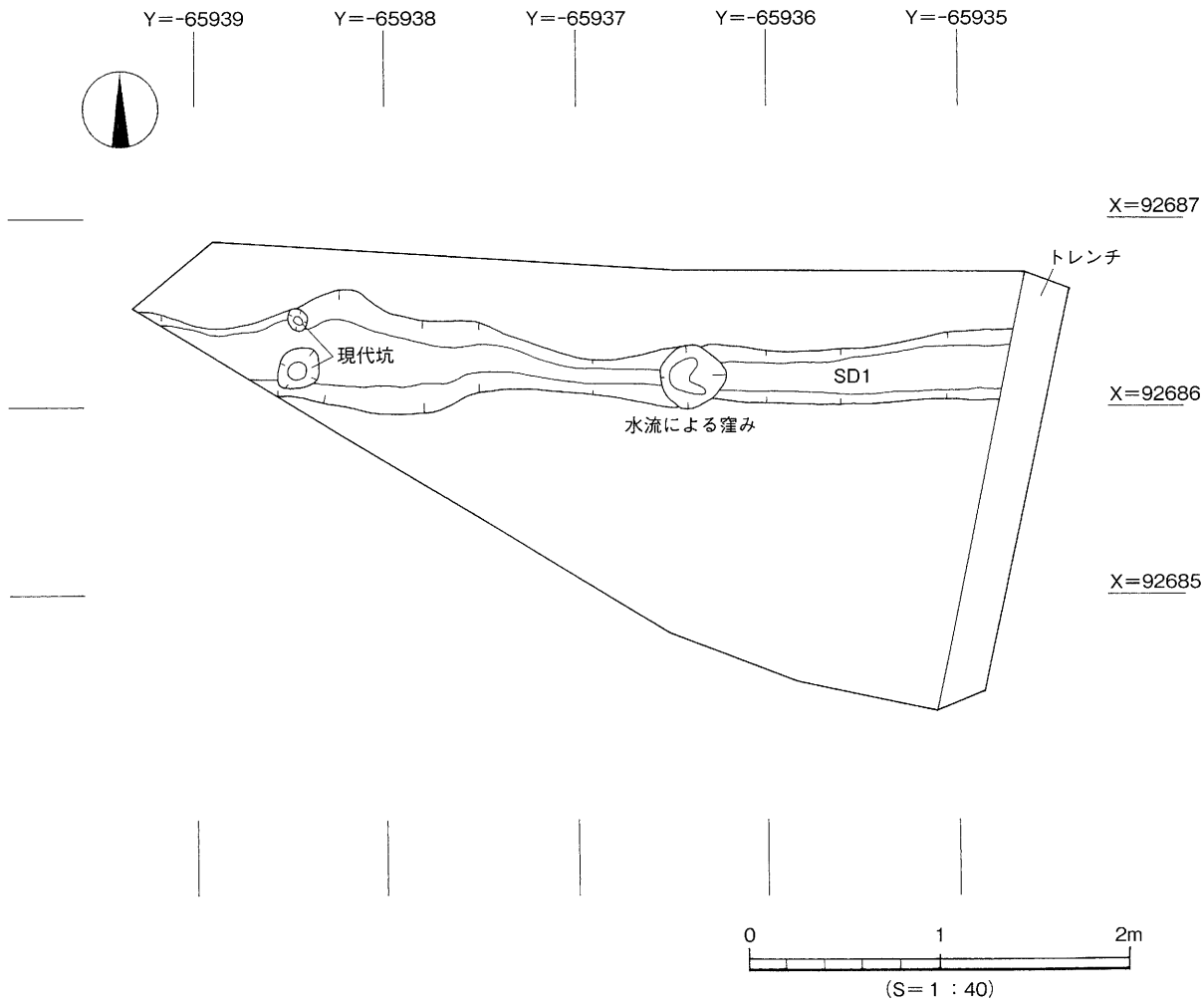
東西方向にのびる溝である。調査区外へと続く。検出規模は長さ4.30m、幅0.28～0.64m、深さ0.01



第27図　１区測量図



第28図　１区出土遺物実測図



第29図　２区測量図

～0.11mを測る。埋土は灰色粗砂である。東から西へ流れる溝である。中央部には水流による窪みがある。東側は現代の削平により浅くなる。遺物は、弥生土器と考えられる小片が出土したのみで図示できる遺物は無かった。

第５節　小結

調査地周辺は、弥生時代後期の竪穴住居が数多く調査され住居の規模、形態、構造、廃絶状況などが解明されつつある地域である。今回の調査でも竪穴住居の検出が期待された。しかし、１区では遺構を検出せず、２区では溝（ＳＤ１）１条だけの検出であった。ＳＤ１は現代の削平のため遺存状態は悪く、明確に時期決定できるような遺物の出土も無かった。ＳＤ１の西側延長線上には、東本遺跡４次調査で見つかった古墳時代の溝ＳＤ301がある。ＳＤ301の埋土は灰色粗砂であり、ＳＤ１と同じである。このことからＳＤ１は、ＳＤ301に繋がるものとも考えられる。

調査地には、周辺遺跡の調査成果より竪穴住居が遺存するものと考えられたが調査面積の狭小さもあり検出されなかった。このことは、発掘調査及び開発行為によって竪穴住居が破壊されることなく保存されたまま後世に残すことができたといえる。

遺構・遺物一覧　―凡例―

（1）以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。
遺構一覧は相原浩二、遺物観察表は相原浩二、岩本美保、村上真由美、佐伯利枝が作成した。

（2）遺物観察表の各掲載について。

法　量　欄　（　）：復元推定値

形態・施文欄　土器の各部位名称を略記。
例）口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部～底部

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。
例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。（　）の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。
例）石・長（1～3）→「1～3㎜の石英・長石を含む」である。
焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

遺物観察表

表25　1区出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形　態　・　施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
94	甕	残高　2.3	外上方に開く口縁部。端部は丸く仕上げる。	ハケ(6～7本/cm)→ヨコナデ	ハケ(10本/cm)→ナデ	灰褐色 にぶい橙色	石・長(1～3) ◎		12
95	甕	底径　3.3 残高　2.2	上げ底の小さな底部。	ハケ(10本/cm)→ナデ [底]ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 褐灰色	石・長(1～2) ◎		12
96	鉢	底径（1.8） 残高　2.0	ボタン状に突出する底部。	ハケ(9～10本/cm)→ナデ・ミガキ	ハケ(9～10本/cm)	にぶい褐色 橙色	石(～1) ◎		12

遺構観察表

表26　溝一覧

溝(SD)	地区	断面形	規　模(m) 長さ(長軸)×幅(短軸)×深さ	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	2区	船底状	4.30×0.28～0.64×0.01～0.11	灰色粗砂	弥生	弥生以降	

写 真 図 版

写真図版例言

1．遺構は、主な状況については、４×５判や６×７判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、35㎜判で補足している。一部の撮影には高所作業車を使用した。

使用機材：カメラ　トヨフィールド45A
レンズ　スーパーアンギュロン　90㎜他
アサヒペンタックス67
ペンタックス67　55㎜他
ニコンニュー FM2
ズームニッコール　28～85㎜他
フィルム　白　黒　ネオパン SS・アクロス
カラー　RAP

2．遺物は、４×５判で撮影した。

使用機材：カメラ　トヨビュー 45G
レンズ　ジンマーＳ　240㎜　F5.6他
ストロボ　コメット／CA32・CB2400
スタンド等　トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド101
フィルム　白　黒　ネオパンアクロス

3．単色図版は、一部を除き、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

使用機材：引伸機　ラッキー 450MD・90MS
レンズ　エル・ニッコール135㎜　F5.6A・50㎜　F2.8N
印画紙　イルフォードマルチグレードⅣ　RC ペーパー

4．製　版　写真図版175線
印　刷　オフセット印刷
用　紙　マットコート110kg

【参考】『埋文写真研究』vol. 1～19　『報告書制作ガイド』　［大西朋子］

1．調査前風景（東より）

2．掘削状況（西より）

1．遺構検出状況（西より）

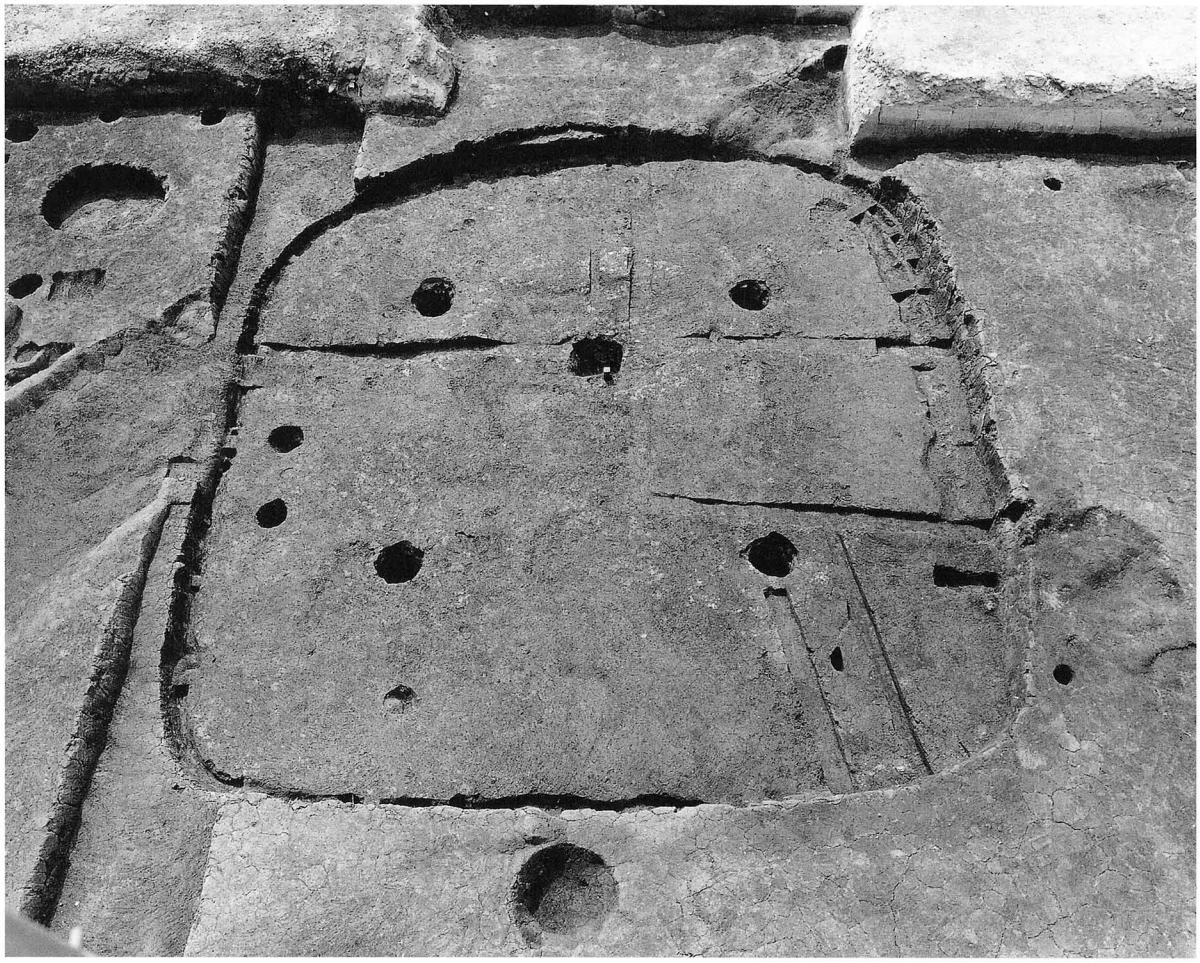
2．竪穴住居ＳＢ１検出状況（西より）

1．作業風景（南西より）

2．竪穴住居ＳＢ１遺物出土状況（北より）

1．竪穴住居ＳＢ１北西部遺物出土状況（西より）

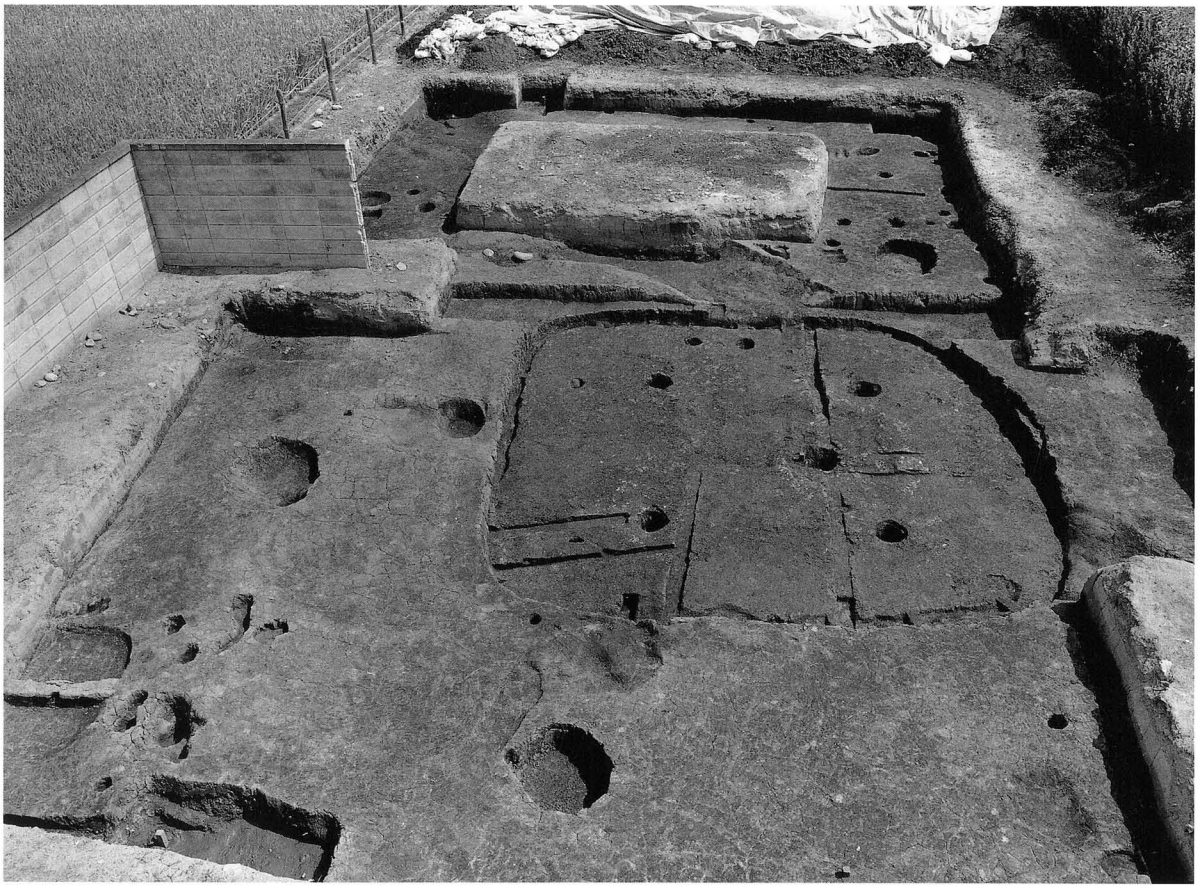
2．竪穴住居ＳＢ１内炉検出状況（南より）



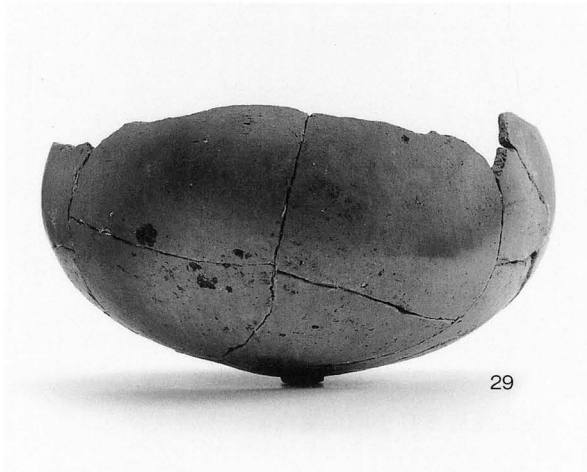
1．竪穴住居ＳＢ１完掘状況（北より）

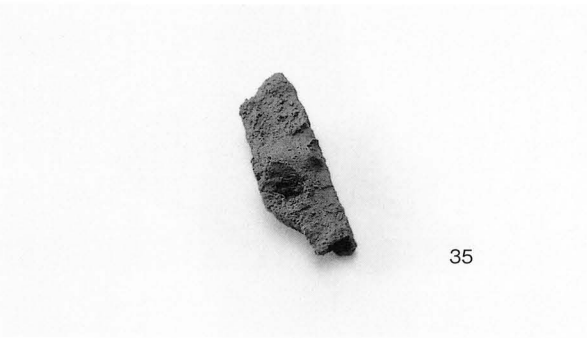
2．ＳＫ２検出状況（南より）

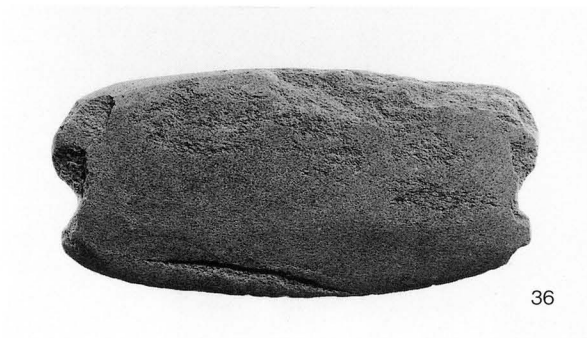
1．現地説明会風景（北より）



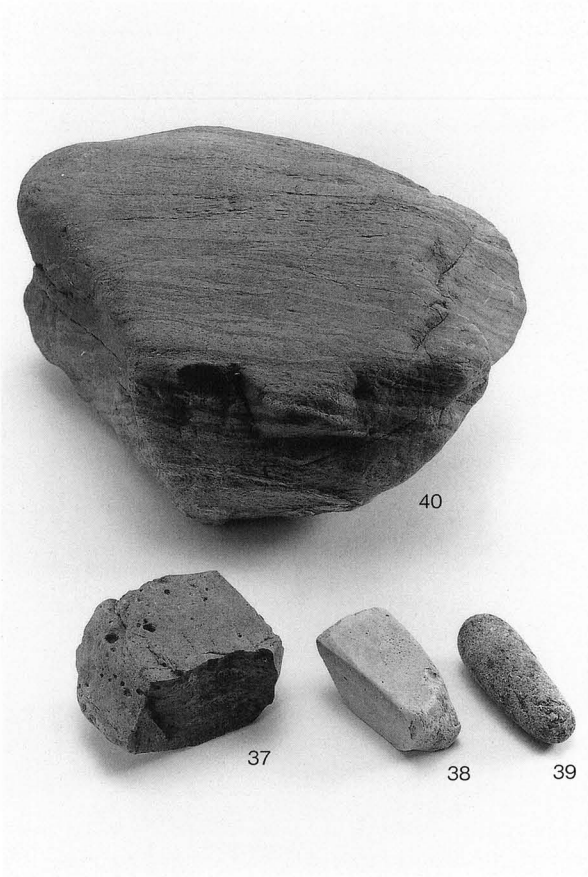
2．調査地完掘状況（西より）



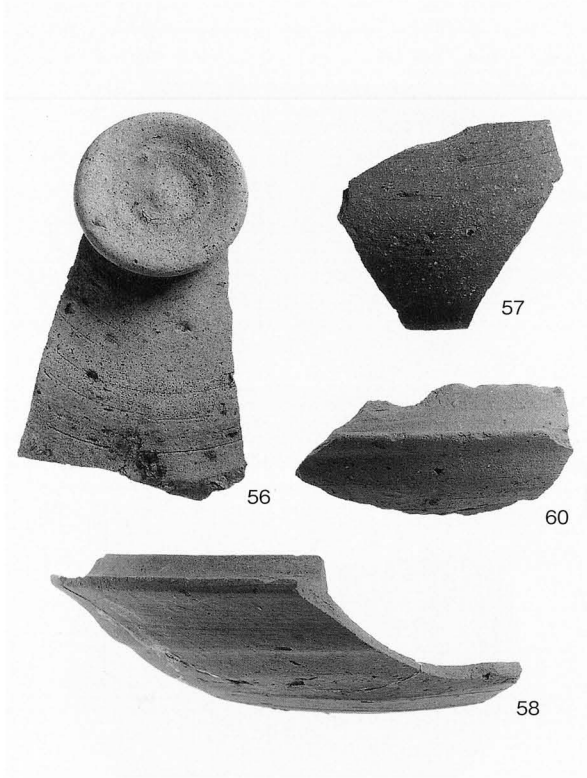




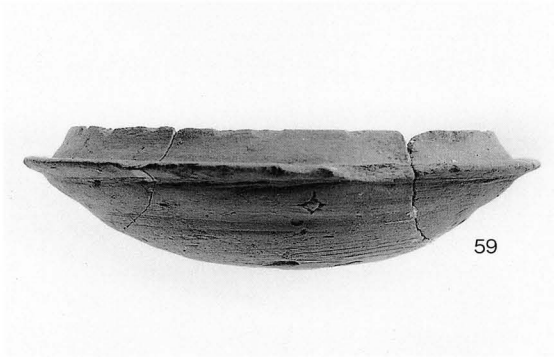
1．竪穴住居ＳＢ１出土遺物①

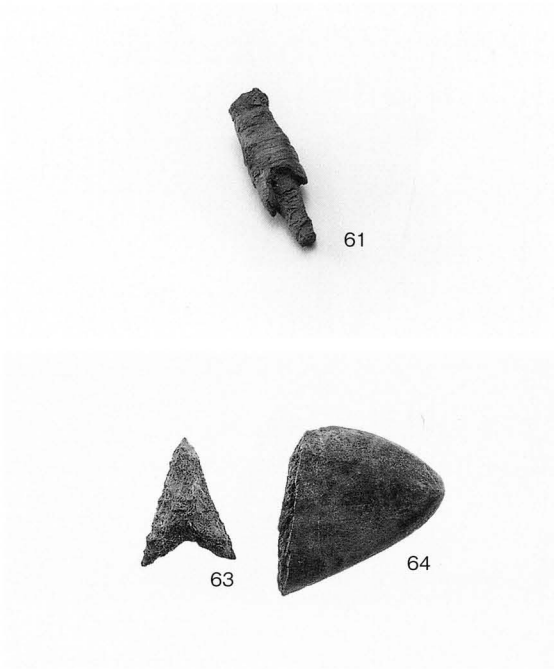


1．竪穴住居ＳＢ１出土遺物②（37～40）



2．ＳＫ２出土遺物（41）





3．ＳＤ２出土遺物（56～61・63・64）

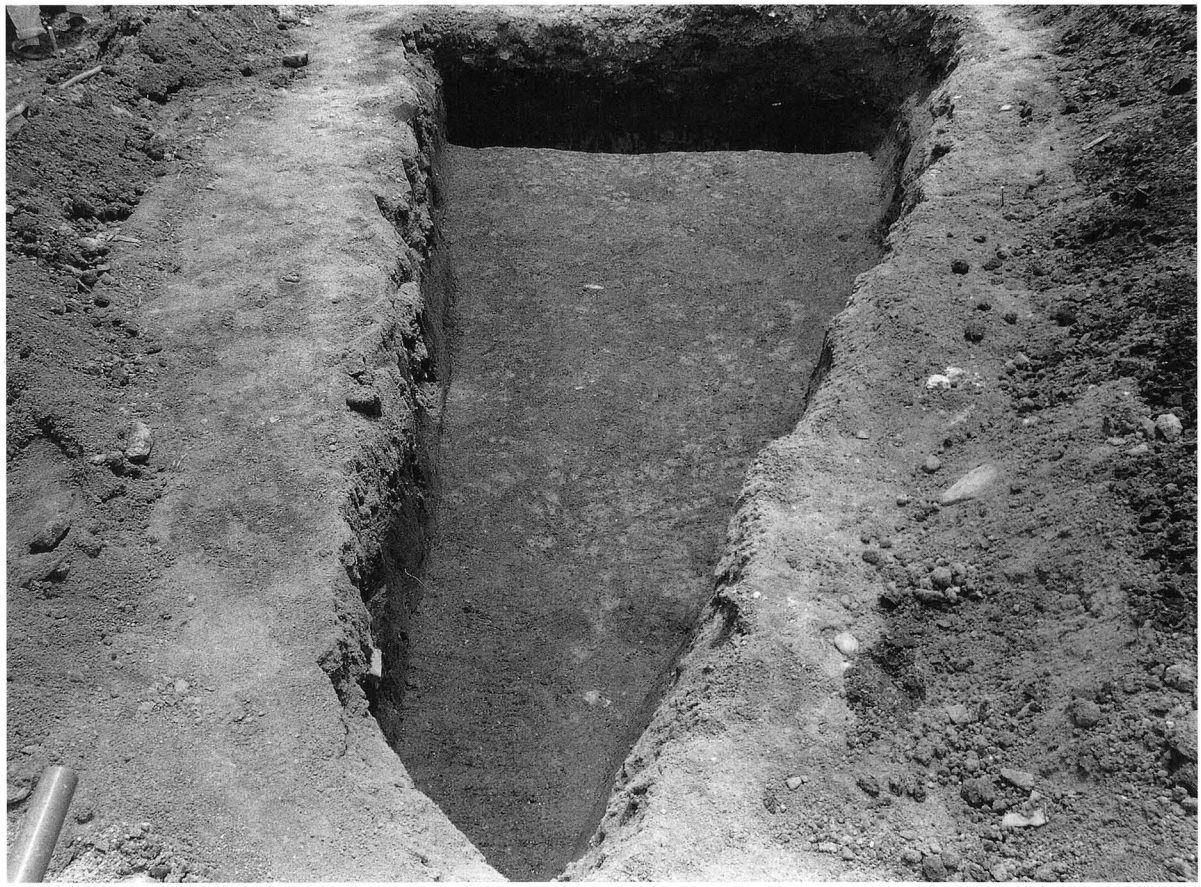
1．調査前風景（北西より）

2．1区調査前状況（西より）

1．1区土層（西より）

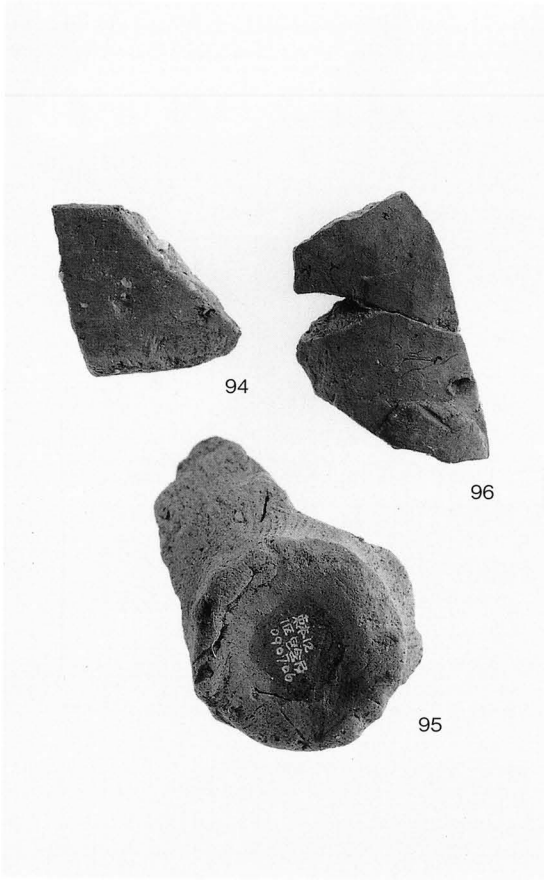
2．1区完掘状況（南西より）

1．2区調査前状況（南東より）



2．2区遺構検出状況（西より）

1．2区遺構検出状況（東より）



2．1区出土遺物

3．2区完掘状況（東より）

報告書抄録

ふりがな	つかもといせき
書名	東本遺跡　－11次・12次調査－
副書名	
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第143集
編著者名	相原浩二
編集機関	財団法人　松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
所在地	〒791-8032　松山市南斎院町乙67番地６　　TEL(089)923-6363
発行年月日	西暦2010年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
つかもといせき じちょうさ 東本遺跡11次調査	えひめけんまつやましつかもと 愛媛県松山市東本	38201		33° 49′ 46″	132° 47′ 21″	20080801～ 20080926	165	車検整備場建設
つかもといせき じちょうさ 東本遺跡12次調査	えひめけんまつやましつかもと 愛媛県松山市東本	38201		33° 49′ 48″	132° 47′ 22″	20090706～ 20090710	9.6	店舗建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東本遺跡11次調査	集落散布地	弥生	竪穴住居、土坑	弥生土器、鉄鏃、石包丁	
		古墳	溝	弥生土器、須恵器	
		中世	柱穴	土師器、瓦器、陶磁器	
東本遺跡12次調査	集落散布地	弥生～古墳	溝	弥生土器	

要約	東本遺跡11次調査では、弥生時代後期後半の竪穴住居１棟を検出した。平面形は隅丸方形を呈する。主柱穴は４基で構成され、東側の壁体付近には入口の施設と考えられる２基の柱穴を検出している。炉は住居中央部のやや南側よりで検出している。焼土や炭の検出状況から、焼失住居と考えられる。このほか弥生時代の土坑、古墳時代の溝、中世の柱穴などを検出している。 東本遺跡12次調査では、２区より時期不明の溝を検出した。

松山市文化財調査報告書 第143集

東 本 遺 跡 —11次・12次調査—

平成22年３月31日　発行

編・集　松山市教育委員会
発　行　〒790-0003　松山市三番町六丁目６番地１
ＴＥＬ（089）948-6605

財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター
〒791-8032　松山市南斎院町乙67番地６
ＴＥＬ（089）923-6363

印　刷　セキ株式会社
〒790-8686　松山市湊町七丁目７番地１
ＴＥＬ（089）945-0111